

高知県埋蔵文化財センター年報

5

1995年度

1996

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

巻頭カラー



奥谷南遺跡窯跡



姫野々城跡出土青磁

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターも平成3年度の設置から本年度で5年目を迎えました。開設当初は調査員10名体制で始動しましたが、今年度に至るまでの間に人員及び体制の整備も順次進められ、平成7年度は調査員22名体制となり、その間には事業課から総務課と調査課の2課体制に拡充されました。この背景には高知県における開発の増加があり、当センターとしても開発に伴う発掘調査に対応するための結果であると同時に、埋蔵文化財保護思想の推進の結果でもあったと考えるところです。

発掘調査は、やはり大規模開発である中村宿毛道路、四国横断自動車道、あけぼの道路等の事業を中心に進められるとともに、高知空港拡張整備事業や土佐市バイパス等の事業に伴う発掘調査も視野に入れて今後の方向を検討していかなければなりません。それと同時に発掘調査の成果をより多くの人々に知っていただくためには、広報・普及活動にもさらに重点をおいて事業を進めなければなりません。そのためには、この5年間の基礎として各調査員の調査・研究面での切磋琢磨とともに埋蔵文化財センターとしてのより充実した発展が望まれるところです。

5年間における当センターの調査成果については、刊行された報告書・年報・研究紀要等により公表しているのでここでは個々について述べませんが、新発見を含む重要な資料の発掘調査も多くあり、原始から近代にかけて高知県の歴史を知るうえでは欠くことのできない調査を行ってきたものと考えます。

今後もさらに発掘調査は進み、貴重な資料の発見も行われると思いますが、当センターの事業実施にあたって御指導、御協力を頂いた関係各位に感謝するとともに、調査の成果が広く理解され、さらなる埋蔵文化財保護推進の一助となればと考えるところです。

平成8年12月

財団法人高知県文化財団
埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

目 次

序

I 財団法人高知県文化財団	1
1. 財団法人高知県文化財団の概要	
2. 財団法人高知県文化財団の組織	
II 埋蔵文化財センター	3
1. 埋蔵文化財センターの概要	
2. 埋蔵文化財センターの組織	
III 年間事業の概要	5
1. 発掘調査事業	
2. 発掘調査報告書刊行・資料管理事業	
3. 普及・啓蒙事業	
4. 研修事業他	
IV 発掘調査概要報告	14
V 条例・規則・規程等	44

例 言

1. 本書は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの平成7年度(1995)事業の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査については、当センターの受託事業、派遣事業以外にも、県教育委員会及び市町村教育委員会で実施された調査についても、県下の状況を把握するために集録した。
3. IVの発掘調査概要報告については、各担当者が執筆した。その他の執筆・編集については森田が行った。

I 財団法人高知県文化財団

1. 財団法人高知県文化財団の概要

(1) 設立趣旨

近年、所得水準の向上や自由時間の増大など社会経済状況の変化を背景に、芸術文化活動に直接参加し、或いは歴史的・文化的遺産に自ら親しむことを通じて、生活の中に潤いとやすらぎを求めるといふ県民の文化的ニーズがかつてなく高まってきている。

このような時代のすう勢の中で、これからの文化行政は、より県民の期待に応えるものでなければならないが、特に、その推進に当たっては、単に行政のみが主導していくのではなく、行政と民間がそれぞれの叡智、力を出し合い、一致協力していくことがなによりも必要である。

高知県文化財団は、こういった使命と目的のもとに、県民文化の振興に資する芸術文化関連諸事業を、県、市町村、民間の力を幅広く結集して総合的、体系的に運営実施すると共に、県民の文化活動の拠点となる各種の芸術文化施設についてもその特性を活かし、公共性を確保しつつ、県民サービスの向上につながる、柔軟で弾力的な管理運営を行うなど、今後の本県の芸術文化活動の推進母体としての役割を担おうとするものである。

(2) 事業内容

- 1) 音楽、演劇、美術その他の芸術文化事業
- 2) 教育、学術及び文化の国際交流事業
- 3) 歴史民俗資料館、美術館等芸術文化施設の管理運営事業
- 4) 埋蔵文化財の調査研究、整理保存、展示等の事業
- 5) その他文化振興に関する事業

(3) 設立年月日

平成2年3月28日

(4) 事務局所在地

高知県 高知市高須353-2

高知県美術館内

2. 財団法人高知県文化財団の組織

(1) 財団組織

1) 理事会役員

理事長 1 名 副理事長 2 名 専務理事 1 名 理事 7 名 監事 2 名

2) 事務局

総務部長（専務理事）－総務課長（美術館副館長）－事務職員

3) 財団組織図



(2) 財団役員

役職名	氏名	備考
理事長	千頭 信也	高知県理事
副理事長	山口 勝己	高知県教育長
副理事長	濱田 耕一	四国銀行頭取
専務理事	山崎 浩	高知県文化環境部参事
理事	松尾 徹人	高知市長・高知市長会会長
理事	筒井 直和	吾北村長・高知県町村会会長
理事	橋井 昭六	高知新聞社社長
理事	吉村 眞一	高知県商工会議所連合会会頭
理事	清水 泉	高知銀行頭取
理事	佐竹 紀夫	高知県文化環境部部長
理事	清田 康之	高知県総務部部長
理事	近藤 美佐	高知地方裁判所民事調停委員
監事	島田 一夫	高知県文化環境部副部長
監事	田辺 睦三	高知市収入役

Ⅱ 埋蔵文化財センター

1. 埋蔵文化財センターの概要

(1) 設立趣旨

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターは、高知県における埋蔵文化財の調査研究及び資料の保管管理を行うとともに、埋蔵文化財愛護思想の普及啓蒙を図り、本県の文化振興に寄与することを目的とする。

(2) 事業内容

1) 埋蔵文化財の発掘調査

県内における遺跡の発掘調査を行い、報告書を刊行する。

2) 埋蔵文化財の保管管理

発掘調査等による出土遺物、調査記録等の整理及び保管を行う。

3) 埋蔵文化財の研究・普及啓蒙

埋蔵文化財について調査研究を行うとともに、その成果をもとに出土遺物の公開展示、現地説明会及び展示会の開催等により、埋蔵文化財愛護思想の啓蒙普及を図る。

4) 埋蔵文化財に関する資料収集及び情報提供に関すること。

5) 高知県立埋蔵文化財センターの管理・運営に関すること。

(3) 設立年月日

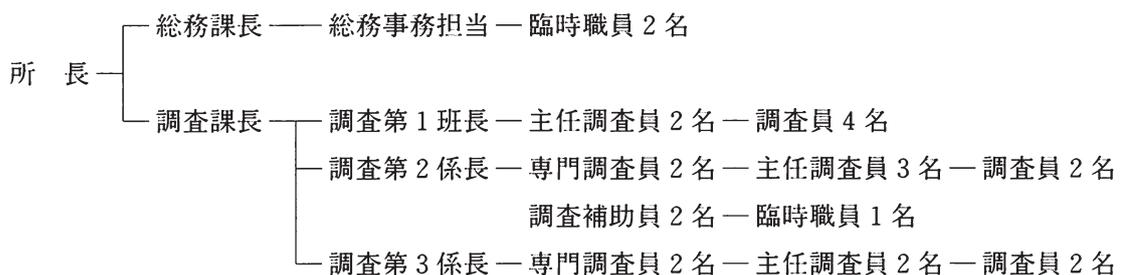
平成3年4月1日

(4) 埋蔵文化財センター所在地

高知県南国市篠原南泉1437-1

2. 埋蔵文化財センターの組織

(1) 埋蔵文化財センター組織図



(2) 埋蔵文化財センター職員

職 名		氏 名	備 考	
所 長		原 雅 彦	高知県文化環境部文化推進課副参事	
総 務 課 長		田 岡 英 雄	高知県文化環境部文化推進課主監	
総 務 担 当	主 幹	吉 岡 利 一	高知県文化環境部文化推進課主幹	
	主 事	石 川 馨	高知県文化環境部文化推進課主事	
	臨 時 職 員	弘 光 恵	高知県文化財団臨時職員	
	臨 時 職 員	伊 東 そ の	高知県文化財団臨時職員	
調 査 課 長		岩 崎 嘉 郎	高知県文化環境部文化推進課副参事	
調 査 担 当	調 査 第 1 班	調査第1班長	山 本 哲 也	高知県教育委員会文化財保護室主監
		主任調査員	小 嶋 博 満	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		主任調査員	廣 田 佳 久	高知県教育委員会文化財保護室主幹
		調 査 員	松 村 信 博	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	江 戸 秀 輝	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	池 澤 俊 幸	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	坂 本 憲 昭	高知県文化財団職員
	調 査 第 2 係	調査第2係長	森 田 尚 宏	高知県教育委員会文化財保護室主幹
		専門調査員	田 坂 京 子	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		専門調査員	宮 地 早 苗	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		主任調査員	松 田 直 則	高知県教育委員会文化財保護室主幹
		主任調査員	田 上 浩	高知市教育委員会総務課指導主事
		主任調査員	伊 藤 強	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	山 崎 正 明	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	曾 我 貴 行	高知県文化財団職員
		調査員補助員	武 吉 眞 裕	高知県文化財団非常勤嘱託職員
		調査補助員	竹 村 三 菜	高知県文化財団非常勤嘱託職員
	臨 時 職 員	藤 川 純 子	高知県文化財団臨時職員	
	調 査 第 3 係	調査第3係長	出 原 恵 三	高知県教育委員会文化財保護室主幹
		専門調査員	佐 竹 寛	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		専門調査員	泉 幸 代	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		主任調査員	前 田 光 雄	高知県教育委員会文化財保護室主幹
		主任調査員	浜 田 恵 子	高知県教育委員会生涯学習課社会教育主事
		調 査 員	藤 方 正 治	高知県文化財団職員
		調 査 員	吉 成 承 三	高知県文化財団職員

Ⅲ 年間事業の概要

1. 発掘調査事業

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターも開設5年目をむかえ、総務課、調査課の2課体制もより充実し、調査員の増員も行われた。調査員の増員はやはり各種大規模調査へ向けての体制整備の拡充として行われ、本年は教育現場からの2名の増員であった。その結果、調査員の総数は22名となったが、この中には昨年度に引き続き高知市教育委員会からの派遣職員1名が含まれている。また、総務課においても事務職員1名の増員があり、本年度の増員は全体では3名であった。

このような体制化における発掘調査事業は、受託事業が中心となっているが、市町村事業への調査員の派遣事業も、その比率はやや減少したとは言え、まだまだ埋蔵文化財センターの全体事業量からすれば一定の比率を持っており、当センターの事業が100%受託事業にはなっていない。

受託事業に関してみれば、建設省による中村宿毛道路関連事業の継続的調査、日本道路公団による四国横断自動車道建設に伴う試掘調査及び本調査の本格化、国道195号線(あけぼの道路)の改良・新設工事に伴う発掘調査等であり、年間の発掘調査面積はやはり増加している。

(1) 受託事業

平成7年度の受託件数は10件であり、国(建設省)、日本道路公団、県からの委託を受けての調査であった。調査件数としては13件であり、建設省からの受託が3件、日本道路公団からの受託は5件、県からの受託は5件であった。四国横断自動車道建設、これに連動する国道バイパス建設等が受託事業の中心であり、調査面積は28,856㎡であった。

建設省関係の受託事業としては、高規格道路である中村宿毛道路建設に伴う継続的調査として、具同中山遺跡群の調査が行われた。本年度分としては中央地区を具同中山遺跡群Ⅱとして着手予定であったが、県道及び市道に隣接しており、かつ人家にも近いため、掘削にあたっては矢板打設を行わなければならない、当初予定の半分の面積の調査となった。このため具同中山遺跡群Ⅱ-1として前半に現地調査、後半には基礎整理を行った。また、昨年度調査の具同中山遺跡群Ⅰの整理作業を進めるとともに船戸遺跡の報告書刊行も行った。この他、建設省関係では須崎バイパス及び土佐市バイパスの確認調査が行われた。須崎・土佐市バイパスともに、四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に対応するアクセス道路としての建設工事であり、高速道路工事と連動している。須崎バイパスについては、確認調査の結果、一部では古墳時代の木器等が出土したが遺跡としての広がり確認できなかった。土佐市バイパスにおいては土佐市高岡町天神・犬ノ場・林口地区の確認調査が行われ、本調査へ向けての資料を得ることができた。

日本道路公団関係では、南国～伊野間の調査として用地確保の遅れていた奥谷南遺跡の発掘が行われたが、人家部分については移転が遅れており、平成8年度についても引き続き調査が行われる予定である。また同時に、昨年度調査を行った福井遺跡と奥谷南遺跡についても基礎整理作業をおこなった。さらに長畝古墳については、整理作業及び報告書の刊行が行われた。伊野～須崎間にお

いては、用地買収の状況に応じながら伊野町と須崎市を中心に確認調査が行われた。伊野町では八田地区の神母谷及び奈路遺跡の確認調査が実施され、神母谷遺跡については一部本調査も行われた。須崎市では須崎バイパスとの合流地点である神田地区の確認調査が行われたが、遺跡の広がりは認められなかった。また、飛田坂本遺跡では、確認と一部の本調査が実施されている。

県関係では、あけぼの道路関連の調査が昨年度に引き続き行われた。本調査が行われたのは南国市の小籠遺跡、土佐山田町の三ツ又遺跡、陣山遺跡であり、確認調査は南国市の下末松地区において行われた。また、各遺跡の整理作業も並行して行われ、小籠遺跡については報告書が刊行されている。坂本ダム関係では継続的に楠山遺跡の調査が行われた。

以上のように、本年度における調査は四国横断自動車道を中心とする事業及び国道バイパス関係の事業が主たる事業となっており、あけぼの道路を加えれば、道路事業が調査のほとんどを占めている状況である。来年度についても道路事業中心の調査体制に変更はなく、これに高知空港拡張整備事業が本格化するものと予測される。

(2) 派遣事業

調査員派遣による発掘調査は21件であり昨年と同数であるが、調査面積は12,655㎡と再び増加している。調査員派遣以外には、県教委からの調査員派遣による調査が3件、土佐山田町教育委員会主体の調査が4件であり、個人住宅、民間開発等に伴う調査も見受けられるが、圃場整備事業に伴う確認調査及び本調査がその主体を占めている。

圃場整備事業に伴う派遣による調査は6件であり、調査面積は8,592㎡と全体の67%を占めている。

南国市－岩村土居城跡・岩村遺跡・久礼田遺跡群 野市町－下ノ坪遺跡 土佐町－高島遺跡
佐川町－上美都岐遺跡 大方町－曾我城跡

また、学術調査、市町村事業、個人住宅、民間開発等に伴う派遣による調査は13件であり、調査面積は4,063㎡であった。

高知市－柳田遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・神田ムク入道遺跡Ⅰ・Ⅱ・介良遺跡・鷺泊橋遺跡

南国市－比江廃寺跡 葉山村－姫野々城跡 本山町－松ノ木遺跡 大月町－ナシケ森遺跡
越知町－女川遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 高知県－高知城跡

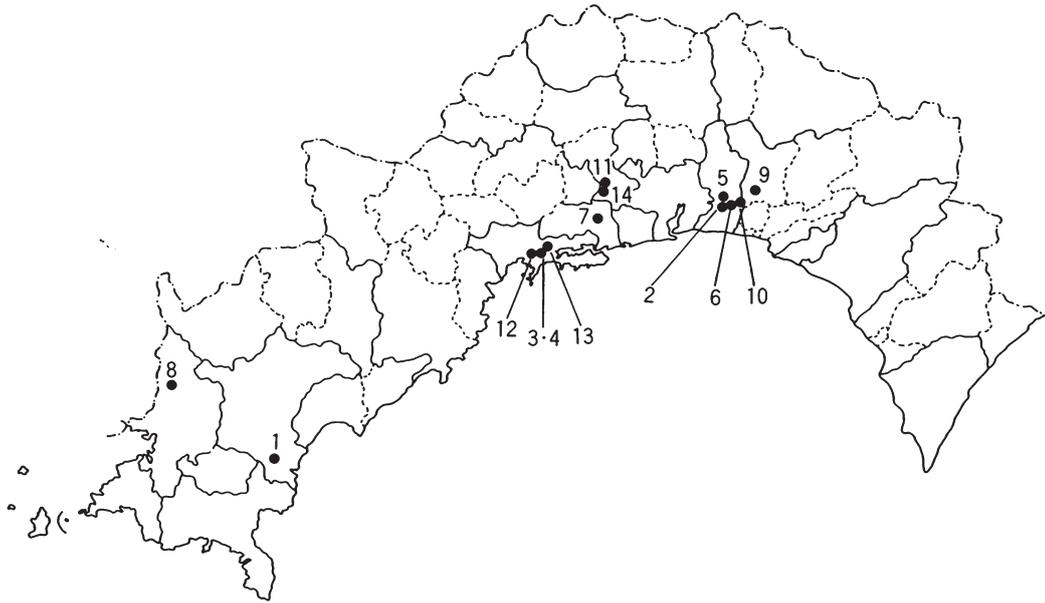
この他、県教育委員会を中心に12件の立会調査が行われており、確認面積は265㎡であった。



松ノ木遺跡



山田三ツ又遺跡



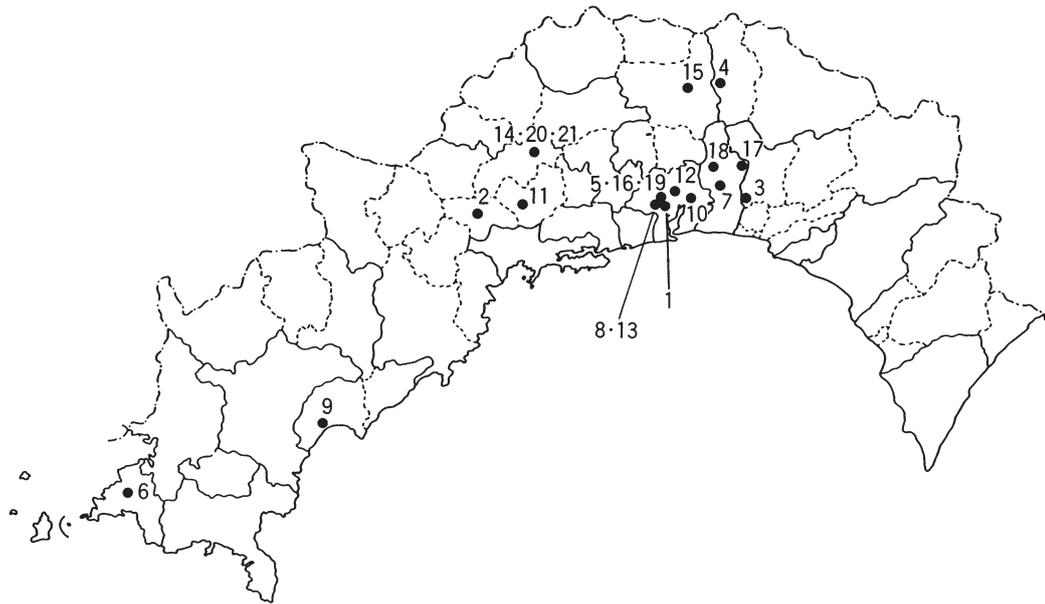
平成7年度 受託発掘調査位置図

平成7年度 受託発掘調査事業

番号	遺跡名	調査略号	所在地	時代	種別	調査面積 (㎡)	調査期間	原因	委託者	調査主体
1	具同中山遺跡群Ⅱ-1	95-1 GN	中村市具同字中山	弥生～古代	祭祀散布地	1,700	H7.5月～11月	高規格道路建設	建設省	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2	小籠遺跡	95-2 RNK	南国市岡豊町小籠	弥生～近世	集落跡	8,322	H7.4月～10月	国道改良工事	高知県	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
3	須崎道路確認調査Ⅰ	95-4 SD 1	須崎市吾井郷	古墳・中世	散布地	230	H7.5月～6月	高規格道路建設	建設省	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
4	須崎道路確認調査Ⅱ	95-4 SD 2	須崎市神田	古墳・中世	散布地	592	H7.11月	高規格道路建設	建設省	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
5	奥谷南遺跡	95-6 NOM	南国市岡豊町小蓮奥谷	旧石器～近世	集落跡	1,250	H7.12月～H8.3月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
6	下末松遺跡	95-7 RNS	南国市下末松字久保屋	近世	散布地	1,200	H7.5月～6月	国道改良工事	高知県	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
7	土佐市バイパス確認調査	95-10 TB	土佐市高岡町字林口・天神・犬ノ場	弥生・古代～中世	散布地	550	H7.6月～7月 H8.3月	国道バイパス建設	建設省	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
8	楠山遺跡	95-11 SK	宿毛市橋上町楠山字五助山	旧石器・縄文	散布地	1,870	H7.7月～11月	ダム建設	高知県	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
9	三ツ又遺跡	95-15 RYY	香美郡土佐山田町中組字三ツ又	近世	集落跡	4,300	H7.8月～12月	国道改良工事	高知県	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
10	陣山遺跡	95-17 RNJ	南国市陣山字南鍵山	近世	散布地	3,692	H7.9月～12月	国道改良工事	高知県	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
11	八田地区確認調査	95-20 IH	吾川郡伊野町八田	縄文～中世	散布地	700	H7.9月～11月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
12	神田地区確認調査	95-28 SBK	須崎市神田	古代・中世	散布地	300	H7.12月～H8.1月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
13	飛田坂本遺跡	95-31 HS	須崎市神田飛田字坂本	縄文・中世	散布地	850	H8.1月～3月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
14	神母谷遺跡	95-34 IHIB	吾川郡伊野町八田字神母谷	縄文～中世	散布地	3,300	H7.12月～3月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

平成7年度 調査員派遣発掘調査事業

番号	遺跡名	調査略号	所在地	時代	種別	調査面積 (㎡)	調査期間	原因	原因者	調査主体
1	鷺泊橋遺跡	95-3 KBS	高知市神田字長田	古墳・古代	散布地	100	H7.4月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
2	姫野々城跡	95-5 HH	高岡郡葉山村姫野々	中世	城跡	320	H7.5月～8月	学術調査	葉山村	葉山村教育委員会
3	下ノ坪遺跡	95-8 NS	香美郡野市町上岡字下ノ坪	弥生～古代	集落跡	1,680	H7.6月～H8.3月	圃場整備	野市町	野市町教育委員会
4	松ノ木遺跡	95-9 MMVI	長岡郡本山町寺家	縄文～古墳・中世	集落跡	100	H7.4月～5月	学術調査	本山町	本山町教育委員会
5	柳田遺跡Ⅰ	95-12 KY1	高知市朝倉字船戸	縄文～古墳	散布地	75	H7.7月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
6	ナシヶ森遺跡	95-13 ON2	幡多郡大月町弘見ナシヶ森	旧石器・縄文	石器製造跡	120	H7.8月～9月	学術調査	大月町	大月町教育委員会
7	比江廃寺跡	95-14 NH	南国市比江北口内	古代	寺院跡	1,132	H7.7月～9月・11月～H8.2月	学術調査	高知県	高知県教育委員会
8	神田ムク入道遺跡Ⅰ	95-16 KM	高知市神田字ムク入道	古墳～中世	集落跡	300	H7.8月～10月	店舗建設	民間	高知市教育委員会
9	曾我城跡	95-18 SC	幡多郡大方町浮鞆字城ノ谷口	中世	城跡	1,081	H7.9月～12月	国営農地造成	農林省	大方町教育委員会
10	介良遺跡	95-21 KK	高知市介良字仁王溝・竹端・重枝	弥生～中世	散布地	800	H7.10月～11月	河川改修	高知市	高知市教育委員会
11	上美都岐遺跡	95-22 KM	高岡郡佐川町東組字上美都岐	弥生・古代～中世	集落跡	2,818	H7.10月～H8.1月	圃場整備	高知県	佐川町教育委員会
12	高知城跡	95-24 KC	高知市丸の内	近世	城跡	120	H7.11月～H8.1月	史跡整備	高知県	高知県教育委員会
13	神田ムク入道遺跡Ⅱ	95-25 KM2	高知市神田字泉川	弥生～中世	散布地	125	H7.12月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
14	女川遺跡Ⅰ	95-26 OG1	高岡郡越知町女川	縄文～中近世	集落跡	46	H7.12月	学術調査	越知町	越知町教育委員会
15	高島遺跡	95-29 TT	土佐郡土佐町南泉	古墳・中世	散布地	300	H7.11月～12月	圃場整備	高知県	土佐町教育委員会
16	柳田遺跡Ⅱ	95-30 YK2	高知市朝倉字勝負ノ川	縄文～古墳	散布地	75	H8.1月	店舗建設	民間	高知市教育委員会
17	岩村遺跡・岩村土居城跡	95-32 NI	南国市福船土居ノ後	弥生・中世	集落跡・城館跡	2,345	H7.9月～H8.2月	圃場整備	高知県	南国市教育委員会
18	久礼田遺跡群 確認調査	95-33 NK	南国市久礼田	古墳・古代～中世	集落跡・城館跡	368	H8.1月～2月	圃場整備	高知県	南国市教育委員会
19	柳田遺跡Ⅲ	95-35 KY3	高知市朝倉字榊甲	縄文～古墳	散布地	125	H8.2月	店舗建設	民間	高知市教育委員会
20	女川遺跡Ⅱ	95-36 OG2	高岡郡越知町女川	縄文・中世・近世	集落跡	175	H8.2月	個人住宅	個人	越知町教育委員会
21	女川遺跡Ⅲ	95-37 OG3	高岡郡越知町女川	縄文・中世・近世	集落跡	207	H8.3月	町道建設	越知町	越知町教育委員会



平成7年度 調査員派遣発掘調査位置図



ナシケ森遺跡調査区



姫野々城跡出土遺物

2. 発掘調査報告書刊行・資料管理事業

平成7年度の整理作業は、中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群ⅠとⅡ-1について行われ、四国横断自動車道関連調査では、現地調査と並行して奥谷南遺跡及び福井遺跡・長畝古墳の整理作業が行われた。長畝古墳については整理作業終了後に報告書が刊行された。県事業関連調査では、やはりあけぼの道路建設に伴う調査において、発掘調査と整理作業が並行して行われ、小籠遺跡については報告書の刊行も行われた。また楠山遺跡についても基礎整理を行っている。現地発掘調査に対して整理期間が不足気味であり、発掘調査と整理作業の事業内容について調整が必要である。

資料の整理・保管については、現在進行中の整理作業が主たる作業となっており、従前の資料整理は進んでいない状況である。

発掘調査に係る資料以外には、埋蔵文化財センターで受け入れた寄贈報告書及び図書の整理を行うとともに、県教育委員会において寄贈を受けた報告書等についても埋蔵文化財センターにおいて管理・保管を行っている。

本年度における報告書の刊行及び資料の貸出等については以下のとおりであった。

平成7年度 埋蔵文化財センター刊行報告書

シリーズ名	書名	所在地	発行者	執筆・編集者
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第24集	小籠遺跡Ⅱ	南国市小籠	財高知県文化財団埋蔵文化財センター	出原・泉・藤方・浜田
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第25集	長畝古墳群	南国市岡豊町定林寺字長畝	財高知県文化財団埋蔵文化財センター	廣田・池澤
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第26集	須崎道路確認調査	須崎市吾井郷・神田	財高知県文化財団埋蔵文化財センター	森田・田坂
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集	船戸遺跡	中村市森沢字船戸	財高知県文化財団埋蔵文化財センター	松田・出原・曾我・坂本・武吉

平成7年度 県・市町村教育委員会刊行報告書

シリーズ名	書名	所在地	発行者	執筆・編集者
葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書第3集	姫野々城跡Ⅱ	高岡郡葉山村姫野々	葉山村教育委員会	吉成
本山町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集	松ノ木遺跡Ⅳ	長岡郡本山町寺家	本山町教育委員会	出原・前田
南国市埋蔵文化財報告書第15集	岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要	南国市福船	南国市教育委員会	坂本・武市
土佐町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集	田島遺跡	土佐郡土佐町南泉字田島	土佐町教育委員会	筒井

平成7年度 遺物等発掘調査資料の貸出

番号	借用者	貸出期間	貸出資料	貸出者
1	愛知県陶磁資料館	平成7年4月1日～平成8年3月31日	能茶山焼皿・椀20点	財高知県文化財団埋蔵文化財センター
2	高知県立歴史民俗資料館	平成7年4月12日～9月30日	土佐国衙・田村遺跡・小籠遺跡・奥谷南遺跡・具同中山遺跡	財高知県文化財団埋蔵文化財センター
3	国立歴史民俗博物館	平成8年2月5日～3月4日	田村遺跡群水田跡写真	財高知県文化財団埋蔵文化財センター

3. 普及啓蒙事業

普及啓蒙事業は、やはり発掘調査に伴う記者発表と現地説明会を中心として行われ、埋蔵文化財に関する展示会等は残念ながら埋蔵文化財センターでは開催されなかった。また、発掘調査現場及び埋蔵文化財センターの見学等については、必要に応じて随時対応するとともに、各種研修会等への講師派遣も行われた。これ以外にも研究会の共催、市町村における展示の協力等が行われた。

(1) 記者発表・現地説明会

発掘調査に伴う記者発表及び現地説明会が12遺跡について行われた。現地説明会では平均80名ほどの参加であり、やや低調であったが、小村神社出土の銅鉾に関する記者発表等は注目され、広く県民の関心を集めている。

平成7年度 現地説明会等開催

番号	遺跡名	内容	開催日	会場	主催	参加人員
1	下ノ坪遺跡	記者発表	平成7年6月23日(金)	香美郡野市町下ノ坪	野市町教育委員会	—
2	下ノ坪遺跡	現地説明会	平成7年6月25日(日)	香美郡野市町下ノ坪	野市町教育委員会	80名
3	姫野々城跡	記者発表	平成7年7月14日(金)	高岡郡葉山村姫野々	葉山村教育委員会	—
4	姫野々城跡	現地説明会	平成7年7月16日(日)	高岡郡葉山村姫野々	葉山村教育委員会	80名
5	小村神社	記者発表	平成7年8月2日(水)	吾川郡日高村下分	日高村教育委員会	—
6	小籠遺跡Ⅱ	記者発表	平成7年8月17日(金)	南国市岡豊町小籠	埋蔵文化財センター	—
7	小籠遺跡Ⅱ	現地説明会	平成7年8月19日(日)	南国市岡豊町小籠	埋蔵文化財センター	120名
8	神田ムク入遺跡	記者発表	平成7年10月13日(金)	高知市神田	高知市教育委員会	50名
9	楠山遺跡	体験学習	平成7年10月19日(木)	宿毛市橋上町楠山	埋蔵文化財センター	12名
10	楠山遺跡	記者発表	平成7年11月1日(水)	宿毛市橋上町楠山	埋蔵文化財センター	—
11	上美都岐遺跡	記者発表	平成8年1月12日(金)	高岡郡佐川町東組	佐川町教育委員会	—
12	上美都岐遺跡	現地説明会	平成8年1月14日(日)	高岡郡佐川町東組	佐川町教育委員会	100名
13	奥谷南遺跡	記者発表	平成8年1月20日(土)	南国市岡豊町小蓮奥谷	埋蔵文化財センター	—
14	比江廃寺跡	記者発表	平成8年2月17日(土)	南国市比江	高知県教育委員会	—
15	比江廃寺跡	現地説明会	平成8年2月18日(日)	南国市比江	高知県教育委員会	80名
16	須江上段遺跡	記者発表	平成8年3月8日(金)	香美郡土佐山田町須江	土佐山田町教育委員会	—
17	須江上段遺跡	現地説明会	平成8年3月10日(日)	香美郡土佐山田町須江	土佐山田町教育委員会	40名
18	女川遺跡Ⅰ～Ⅲ	記者発表	平成8年3月25日(月)	高岡郡越知町女川	越知町教育委員会	—
19	宮野々遺跡	記者発表	平成8年3月26日(火)	高岡郡大野見村宮野々	大野見村教育委員会	—



楠山遺跡体験学習

(2) 研究会等

昨年度は古代学協会・四国支部大会，中・四国旧石器文化談話会等が高知県を会場に行われたが，本年度は織豊期城郭研究会が共催事業として開催された。また，全国埋蔵文化財センター法人連絡協議会研修会が高知県埋蔵文化財センター担当で実施された。発掘調査及び埋蔵文化財センターの見学では，県立学校初任者研修，高知県議会総務委員会視察等が行われ，県外からの視察も例年と同様にあり，普及活動に努めた。

● 研究会等

「第2回 織豊期城郭研究会」

会 場 国民宿舎桂浜荘
日 時 平成7年9月2・3日
参加者 130名

● 遺跡・施設見学等

「全国埋蔵文化財センター法人連絡協議会研修会」

会 場 高知会館
日 時 平成7年8月10・11日
参加者 150名

● 講師派遣・展示協力等

「高知市秋冬市民講座 高知・城物語」

場 所 高知市立公民館
日 時 平成7年10・11月
参加者 200名

「高知県議会総務委員会視察」

場 所 具同中山遺跡群Ⅱ
日 時 平成7年8月1日
参加者 県議11名他

「特別企画展 縄文からのメッセージ」

場 所 本山町立大原富枝文学館
日 時 平成7年8～10月

「県立学校初任者研修見学」

場 所 高知県立埋蔵文化財センター
日 時 平成7年10月20日
参加者 教員27名他

● 視察・資料調査等

平成7年10月16日 大阪府文化財調査研究センター
平成7年11月8日 茨城県教育財団
平成7年2月9日 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
平成7年2月21日 青森県埋蔵文化財調査センター



織豊期城郭研究会



全国埋蔵文化財センター法人連絡協議会研修会

4. 研修事業他

本年度も奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修へ参加するとともに各会議等へも参加し、情報交換を行った。また、職員研修として県外の調査例・施設の視察及び出土遺物の調査等も行われた。さらに、本年度からは部外講師招聘による職員研修が開始され、今後も年2回の開催を予定している。労働衛生研修も部外講師により行われた。

平成7年度 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修

参加研修名	期 間	参加者
環境考古課程	平成7年11月28日～12月15日	専門調査員 宮地早苗

平成7年度 高知県埋蔵文化財センター職員研修

研修内容	日 時	講 師	所 属
日本における磁器の誕生	平成8年2月21日	倉田芳郎	駒沢大学教授
銅鐸研究の諸問題	平成8年2月23日	寺沢 薫	シルクロード学研究中心研究交流課長補佐

会 議 等 参 加

参加会議等	日 時	参加者
全国埋蔵文化財法人連絡協議会第16回総会(愛知県)	平成7年6月8・9日	原所長・出原調査第3係長 石川主事
全国埋蔵文化財法人連絡協議会第16回研修会(高知県)	平成7年8月10・11日	センター職員全員
全国埋蔵文化財法人連絡協議会中国・四国・九州ブロック会議	平成7年11月9・10日	原所長・佐竹専門調査員 吉岡主幹
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 コンピュータ等研究委員会 中国・四国・九州ブロック地区大会	平成7年9月22日	廣田主任調査員・藤方調査員

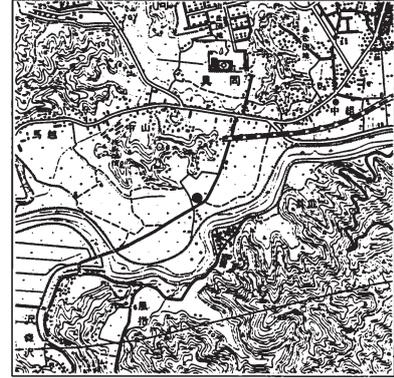


職員研修「銅鐸研究の諸問題」

IV 発掘調査概要報告

具同中山遺跡群 (95-1 GN)

1. 所在地 中村市具同字中山
2. 立地 中筋川左岸の沖積地
3. 時代 弥生時代～古代
4. 調査期間 平成7年5月19日～平成7年11月16日
5. 調査面積 1,672㎡
6. 担当者 伊藤強・松田直則・山崎正明



7. 調査内容 具同中山遺跡群は、昭和61年以来数度の発掘によって、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。四万十川やその支流域には、多くの遺跡が存在している。中でも本遺跡は、古墳時代の祭祀遺跡として全国的にも注目されてきた。昨年度の発掘調査でも祭祀に使用したと思われる鉄剣など、貴重なものが多く出土している。本年度の調査では、弥生時代、古墳時代を中心として甕、壺、高杯、椀、鉢などを中心に約6,500点の遺物が出土した。

弥生時代では、甕、壺を中心に約900点の土器片、数点の木製品、赤色チャート製の石鏃が1点出土している。弥生土器は主に中期中葉に属するもので、壺は細頸壺と広口壺に大別でき、口縁がラッパ状に開く広口壺が主体をしめる。甕は所謂土佐型甕の系譜を引くもので、あまり膨らまない胴部から内側に一旦すぼまり口縁部へ大きく外反するタイプである。県西部においては、当該期の資料は数少ないが、近年の発掘調査の増加により資料も蓄積され、徐々に弥生時代の土器様相も解明されつつある。今時資料も広く四国西南部の弥生期を把握する上での重要な資料となるであろう。

古墳時代は4～5世紀を中心に約5,000点の土師器、若干の須恵器、木製品、そして白玉が2点出土している。器種構成の中心は甕でありその他に高杯、椀、手捏土器などがあり、昨年度の具同中山遺跡の出土遺物に比べ、遺物総点数はかなり少ないものの、器種構成も、土器のタイプもほぼ同じであると考えられる。調査区西南部では土製模造鏡が1点出土している。土製模造鏡は紐に孔が2つ穿たれたものであり、5世紀代の高杯と供伴している。また調査区西部中央で出土した土師器の甕は、器高67.8cm、胴径57.8cmと県西部出土の土師器の中では、特に大型のものである。周辺の古津賀遺跡では、須恵器の大甕を祭祀に使用しており、今回の土師器の甕についても、大型製品を中心に据えた祭祀に使用され、現位置に廃棄された可能性も考えられる。

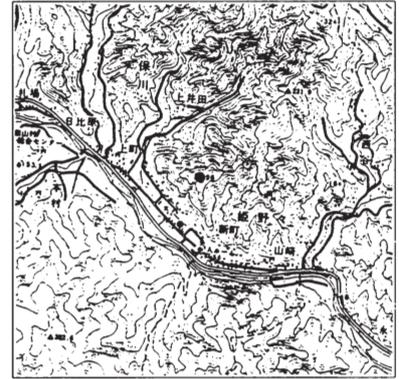
今回の発掘でも二時期の自然流路が確認されたが、具同周辺には中筋川に流れ込む自然流路が縦横に存在しており、それら流路に沿って小規模ではあるが、頻繁に祭祀を行った痕跡を広範囲に確認できる。その祭祀行為は、洪水に関連した水の祭りと考えられてきたが、最近の調査、研究によると、本流域での祭祀行為と支流域でのそれとが相違する可能性も考えられており、今後考察を必要とする。



土師器 甕出土状況

ひめのの
姫野々城跡 (95-5 HH)

1. 所在地 高岡郡葉山村姫野々886-1他
2. 立地 新莊川北部山地より派生する丘陵上
3. 時代 南北朝～戦国時代
4. 調査期間 平成7年5月22日～8月7日
5. 調査面積 320m²
6. 担当者 吉成承三



7. 調査内容 姫野々城跡は、土佐の中世、高岡郡一帯を治めていた津野氏によって築かれたとされている城であり、新莊川の中流左岸に開けた河岸段丘の北、標高192mを測る小山丘上に立地する。平成6年度に国庫補助事業による学術調査（一次調査）が行われ、主郭にあたる山頂部の調査では、礎石建物跡、掘立柱建物跡、堀状遺構、集石遺構などが検出され、それに伴い土師質土器、国産陶器（備前焼）、瓦質土器（河内産：羽釜等）や、輸入陶磁器（青磁・白磁・青白磁・青花）など城が機能していた時期を知る上で非常に貴重な遺物が出土している。

今回の調査は平成6年度一次調査に引き続き、遺構が確認された主郭部分を中心に調査区を拡張し発掘調査を実施した。主郭部分は、標高192mを測る山頂部に東西23m、南北最大幅8.9mの曲輪があり、比高差3～5m下に西方と南方に張り出した帯曲輪が上の段の曲輪をとり囲むように巡っている。発掘調査では山頂部の曲輪を「詰ノ段」、帯曲輪全体を「二ノ段」と呼称し、主に二ノ段西と二ノ段南の平坦面を中心に調査区を拡げた。詰ノ段では、2間（3.80m）×1間（1.25m）の地山岩盤を掘込んだ掘立柱建物跡を検出した。出土遺物は、ピットから土師質土器の杯の完形品が3個体出土しているのをはじめ表土層中より青花（染付）の皿（B群）などが出土した。二ノ段西では一次調査で確認されている礎石の並びが検出され東西二間（4.40m）以上、南北一間（2.00m）、柱間寸法2.20mを測る東西棟礎石建物になる可能性が高まった。礎石検出面上において、土師質土器の杯・皿が集中して出土している。二ノ段南では、幅2m、長さ6mの直径20cm前後の円礫集石遺構が検出され、さらに、調査区西側部では詰ノ段の下場のラインに沿うように長さ12m、直径30～40cm前後の角礫を2、3段積み上げた石積み遺構を検出した。また、集石の下は平らに成形した地山岩盤上に礫石を配していることが確認された。集石検出面の一部には、玉砂利と、黄色瓦礫土で交互に固く整地されている箇所があり、整地層中より、丸瓦片が出土している。二ノ段北は、今年度新たに調査区を設け発掘調査を行った。その結果、帯曲輪に成形した段階の整地層中より多量の土師質土器、14～15C代を中心とする青磁・白磁の碗・皿、15C後半～16C前半代の青花（染付）皿などの輸入陶磁器類、国産陶器（瀬戸・備前）、また、筭、飾り金具、刀の切羽などの銅製品も出土している。これらの遺物を包含している整地層下では、岩盤を掘込んだピットが確認され、帯曲輪成形段階以前に掘立柱建物が建てられていたことが明らかとなった。

このように主郭部分では、各曲輪によって検出された遺構が様相を異にするが、出土遺物の帰属時期を整理すると、概ね13C後半～14C代の一群と、15C前半代、15C後半～16C前半代の三時期に中心的時期を求めることができる。今回の調査結果により、特に各曲輪の時期的な変遷、検出遺

構の性格について検討を加えるための貴重な資料が得られた。



二ノ段西 礎石建物跡検出状況



二ノ段北 堀立柱建物跡

おくたにみなみ

奥谷南遺跡 (95-6 NOM)

1. 所在地 南国市岡豊町小蓮 奥谷 字山ノ神・清山・エボシ岩
2. 立地 南東に開く谷及びその両側の尾根上
3. 時代 旧石器時代～近世
4. 調査期間 平成7年12月20日～平成8年3月27日
5. 調査面積 1,250m²
6. 担当者 松村信博・山崎正明
7. 調査内容 四国横断自動車道に伴う当遺跡の調査も今年度で2年目に入る。



従来奥谷南遺跡は縄文時代の遺物散布地として知られていたのみで、遺跡の性格については不明な部分が多かった。平成6年度の調査の結果、遺跡周辺の南東に開いた谷とその両側の尾根を中心に、縄文～近世の各時期にわたって、多くの貴重な遺構を確認することが出来た。縄文中期末の貯蔵穴群・弥生中期末の高地性集落・弥生終末の石室墓を含む土坑墓群・近世(17世紀中葉)の儒墓等、得られた成果は大きい。

今年度の調査は、遺跡全体をⅠ～Ⅶの調査区に分けたうちのⅤ区とⅦ区についてのものである。Ⅶ区については平成7年12月～平成8年2月の期間で調査終了(750m²)、Ⅴ区については平成8年3月以降の調査となったため、本年度は全体の半分500m²のみの調査にとどまった。残り500m²については平成8年度に調査を行う予定である。

Ⅶ区は遺跡地の東端の尾根に位置する。平成6年度調査で、猿投窯陰刻花文緑釉陶器(K-90)の出土した地点である。陰刻花文緑釉陶器は、寺院・官衙以外ほとんど出土例のない当時の最高級品で、四国では数遺跡で出土例が知られているに過ぎない。地形から山岳寺院の可能性が強いと予想し、調査を進めていた。今回の調査地は西斜面標高65～75m付近で、急斜面を削り出し、谷を埋め立て幅10～15m・奥行70～80mの平坦部をつくり出している。ここから山岳寺院関連ではないかと見られる遺構(堀立柱建物跡・埋甕)と、同時期に機能したロストル構造を持つ須恵器窯が確認さ



Ⅶ区、山岳寺院関連遺構

れた。山岳寺院遺構面及び周辺包含層中からは、先述の陰刻花文緑釉陶器はじめ篠窯須恵器鉢・畿内産黒色土器など10世紀を中心とした時期の遺物が出土している。これらの遺物は、県内では官衙関連など特定の遺跡から出土しているだけであり、このことから当遺跡が特殊な性格を有していたことがわかる。また一定量の瓦が出土しており、瓦葺の建物の存在も推定される。11世紀末の白磁・12世紀後半～13世紀初頭の龍泉窯青磁も出土しており、山岳寺院は9世紀末～13世紀初頭にかけて存続していたと考えられる。

ロストル構造を持つ窯跡が検出されたのは寺院関連遺構の南側緩斜面である。窯は焼成部1.6m×1.1m、燃焼部1.0m×1.2m、南西側に5m×4mの灰原を持つ。灰原は4層の灰層を持ち、各灰層から椀・坏など供膳具を中心とした須恵器が出土している。窯体は地山粘土を掘り残して造られている。焼成部は2条の火床と2本の分焰柱を持ち、床面は25～30°の傾斜を有する。焼成部からも灰原と同様、供膳具を中心とする須恵器が出土、遺物の時期からこの窯は10世紀中葉に機能した須恵器窯と考えられる。香川県・京都府などに類例が散見されるが、高知では初めての検出例となった。



ロストル構造をもつ窯・焼成部

この窯の下層から5基の土師器焼成土坑を検出した。須恵器窯・土師器焼成土坑等の生産遺構群と山岳寺院遺構面とを結ぶ斜面には通路状遺構も確認されており、10世紀の須恵器窯周辺は山岳寺院に須恵器・土師器を供給する役割を担う土器生産工房であった可能性が高い。

この寺院に関する文献は残っていないが、16世紀末に編纂された長宗我部地検帳・奥谷村に「清山寺」「トウノモト」など寺院の痕跡を示す地名が残されている。遺物整理過程を通じて寺院の実態を明らかにしていきたい。

V区は奥谷南遺跡命名の契機となった縄文石斧が出土した場所で、岩陰遺跡と想定した地点である。岩自体は、戦後取り除かれて現存しないが、岩陰で生活が営まれた地点2ヶ所（1ヶ所は現存する）を確認した。縄文時代前期・中期の遺物を含む落盤層から縄文土器・石鏃・叩き石・石器剥片とともに南四国最大と見られるサヌカイトの盤状剥片が出土した。平面形は16cm×14cmのひし形、厚さ2cm弱、素材として運ばれてきた後、何らかの理由でこの岩陰で放棄されたものだろう。大量に出土した石器剥片とともに、この岩陰で石器が製作されたことを物語る資料である。

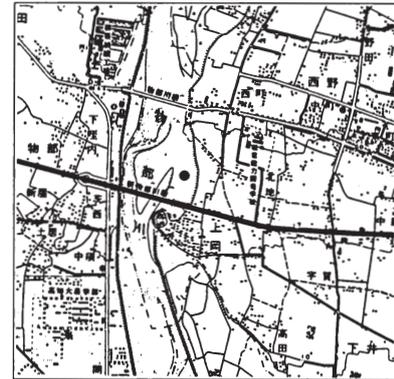
この落盤層の下層に縄文時代前期以降だと考えられる黒色土層が約40～100cmの厚さで堆積している。この層を掘り抜いた下から旧石器時代終末（約1万2千年前）のマイクロ・コア（細石核）が出土した。高知平野周辺の遺跡から旧石器時代の遺物が確認されたのは、高知市高間原古墳の床面から細石核が見つかった例しかなく、当時の遺跡に伴う出土例としては初めてのことである。剥片・スクレイパーも共伴しており、旧石器時代の石器製作址の可能性もある。平成7年度調査では細石器の存在が確認された段階であり、詳細な報告は平成8年度調査を待って行いたい。



V区、現存する岩陰

しものつぼ
下ノ坪遺跡 (95-8 NS)

1. 所在地 香美郡野市町上岡
2. 立地 物部川東岸の沖積平野
3. 時代 弥生・古墳・奈良・平安時代
4. 調査期間 平成7年6月5日～平成8年3月28日
5. 調査面積 1,680㎡
6. 担当者 池澤俊幸・松村信博・小松大洋（野市町教



育委員会)

7. 調査内容 高知県中央臨海部の香長平野は、縄文時代後期以降の人々の活発な営みの跡が、数多く残されている地域である。当遺跡は、現在では土佐湾より物部川を約3 km遡行した河川沿いにある。周辺の物部川下流域には、弥生～古墳時代の集落跡や古墳、古代の窯跡、官衙的遺跡が数々確認されている。また、上流にあたる北方には、土佐国衙跡や土佐山田町北部の窯跡群が存在する。当遺跡は、条里地割が観察できることで野市町文化財に指定されていたが、94年度より野市町教育委員会によって行われた団体営圃場整備事業に伴う発掘調査により、初めて遺跡の内容が明らかにされた。検出された主な遺構は、弥生～古墳時代の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物、溝、流路跡等である。古墳時代の竪穴住居跡では、カマド跡が県下では珍しく良好な状態で検出された。また、包含層や流路から、搬入の弥生土器、古代の円面硯、緑釉陶器、革帯装飾具等をはじめ、多数の遺物も出土した。95年度は、引き続いて遺跡中央部の調査が行われ、前年度を上回る数の遺構、遺物が検出された。弥生時代と古代の主なものについてあげる。

まず、弥生時代では、新たに8棟の竪穴住居跡が検出された。平面形はすべて円形を基調とする。これら8棟の住居跡のうち5棟から、ガラス小玉が出土した。このように複数の住居跡から、多数のガラス小玉が出土した例は本県で初めてである。とくにST11からは、80個を超えるガラス小玉と、袋状鉄斧、鉞、鉄鎌等の鉄器が出土している。当住居は最大径8.06mを測るが、一回り小さい住居からの拡張が確認できた。直径約6mの住居を廃棄後、土を入れて床を張りなおし、柱もより太いものにして建て替えているが、その際中央ピットの位置は動かされていない。また、埋土中に遺物の集中する層があり、最終的な廃棄時に何らかの儀礼が行われた可能性も考えられる。その他の住



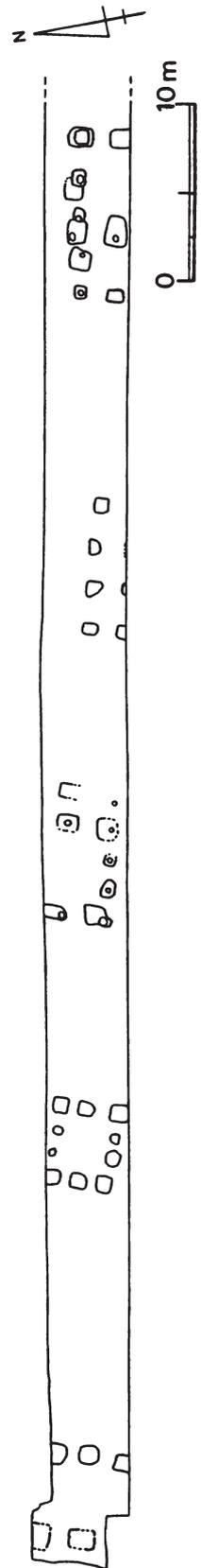
弥生時代大溝 遺物出土状況



古代 掘立柱建物跡

居跡では、石製勾玉、朱付着の石、讃岐型土器、焼失住居等が検出されている。また、幅2.8m、深さ0.66mの大溝の一部が検出され、多くの遺物も出土した(写真)。この溝に流水の形跡はない。その他、数々の土坑より、多量の遺物が出土した。鉢や小型甕を埋納したもの、鉄器が出土するもの、被熱の痕跡があるもの等があり、平面形も円形や溝状など多様である。これら遺構に伴う遺物は、弥生時代後期前半頃のものと考えられる。また、集落の東側で弥生時代中期から後期前半にかけて存在したと思われる自然流路が検出され、各時期の土器や、扁平片刃、大型蛤刃石斧等の石器も出土した。特に、流路が埋没する後期前半には、各所に完形に近い土器を含む集中がみられた。このように、トレンチ状の調査ながら、竪穴住居群、大溝、土坑群、流路等が良好に遺存していることが確認できた。

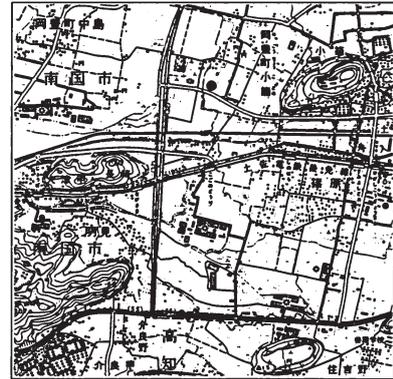
次に、今回古代で注目すべきものは、大別して2種ある。一つは、鍛冶滓、鞆羽口等の遺物とそれらの伴う遺構群である。古代に鍛冶が行われたことを示す遺構、遺物の検出は、本県初例である。これらの遺構は、直径又は長辺が1.0m～1.2m程の円形や方形の土坑状のものが多く、内壁面に粘質土を張ったもの、焼土層や炭化物層が認められるもの、被熱した鉄砧石とみられるものが伴うもの等がある。いま一つは、各種陶硯、赤彩土器等の遺物と、大型方形掘方の柱穴を持つ掘立柱建物群である。その中には、一辺が1.2m前後の柱穴で構成されるものがある。この柱穴の埋土はよく締まった褐色土と暗褐色土の互層となっており、交互に叩き締めたものと考えられる。根石のようなものは全く見られない。そして、当建物の柱穴は根石を持つ柱穴に切られている。その他、数枚の土師器坏を重ねて埋納したものも確認できた。建物はほとんど調査区外へ延びており、全容を解明するに到っていない。これらの遺構は伴う遺物より、奈良時代後半から平安時代初頭にかけてのものと思われる。注目すべき遺物としては、土器を一括廃棄した土坑より、県下最古段階の回転台使用の土師器を中心とした遺物が出土している。土師器の数が勝るが須恵器も存在し、坏、皿には同形態同法量で土師器と須恵器が見られる。また、時期の異なる自然流路内ではあるが、回転台使用の土師器や篠窯産捏ね鉢が一括性の高い状態で集中して出土した。ここでの坏、皿はほとんどが土師器となっている。これらの遺物は、資料の不足していた当該期の土器編年において重要な資料となるものである。最後に、古代の当遺跡の消長を見てみると、奈良時代後半から平安時代初頭の掘立柱建物を主として盛行する遺構群は、9世紀後半頃には急速に衰退する。そして、流路出土の篠窯産捏ね鉢や摂津型羽釜の時期を最後に、包含層出土のものも含めて出土遺物も途絶える。



古代 掘立柱建物
配置図

こごめ 小籠遺跡 (95-2 RNK)

1. 所在地 南国市岡豊町小籠
2. 立地 更新世扇状地（長岡台地）の西端部
3. 時代 弥生～古墳時代・古代・中世・近世
4. 調査期間 平成7年4月11日～10月31日
5. 調査面積 6,767㎡
6. 担当者 出原恵三・泉幸代・浜田恵子



7. 調査内容 国道195号道路改良（あけぼの道路建設）に伴う調査は2年目に入る。今年度の調査では弥生時代終末～古墳時代初頭の集落跡，古墳時代後期の竪穴住居跡，古代の土坑と溝，中世の掘立建物跡と溝，近世の土坑と溝などの遺構が確認された。

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡は新たに14棟が検出され，昨年度検出分を含むと合計21棟となった。各々の住居跡からは多量の弥生土器が出土し，一括性の高い資料が得られている。遺物としては他にST11出土のヤリガンナ（鉄器），ST13出土の磨製石包丁，ST17出土の打製石包丁等も挙げられる。また，今回の調査で特に注目される遺物としては，搬入土器を挙げることができる。中でも，ST14床面から出土し完成品に復元された岡山県吉備地方の甕は，当該期西日本の各地に搬出されているもので，県下でその出土が確認されているのは現在までに西分増井遺跡（春野町）と松ノ木遺跡（本山町），及び当遺跡のみである。この他搬入器としては徳島県鮎喰川流域から多数搬出されている東阿波型土器と，河内産の庄内式土器も出土している。集落は調査区の北にさらに広がっているものと思われ，吉備や阿波からの搬入土器の存在も考え合わせると，小籠遺跡は長岡台地の集落群の中でも特に大規模な拠点集落であったと考えられる。当集落は時間にして約50年前後という短期間に営まれた遺跡であり，弥生時代から古墳時代への時代の転換期に出現し展開した遺跡として位置付けることができる。

古代の遺構は土坑19基，溝1条，ピット数個が検出され，9世紀末～10世紀初頭の土坑SK130とSK136の床面からは土師器の甕・杯・皿，黒色土器A類碗，灰釉陶器碗等の遺物がまとまって出土している。県下ではこの時期の遺構出土の一括性の高い資料は少なく，当時の土器様式を明らかにする上での貴重な資料が得られた。中でも，黒色土器A類碗は搬入品（和泉産）と共に在地産のものが見られ，在地産黒色土器の最古例として位置付けられるものである。



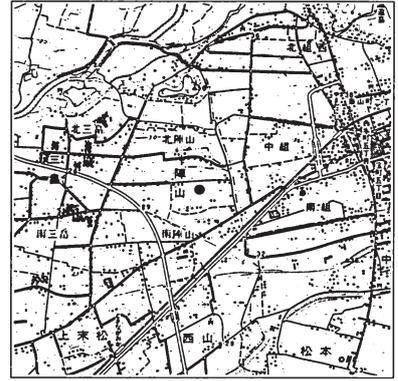
古墳時代初頭の竪穴住居跡 (ST 13・14)



吉備型甕出土状況 (ST 14)

陣山遺跡 (95-17 RNJ)

1. 所在地 南国市陣山字南鍵山
2. 立地 更新世形成の扇状地上
3. 時代 江戸時代
4. 調査期間 平成7年9月18日～12月13日
5. 調査面積 3,700m²
6. 担当者 浜田恵子・吉成承三



7. 調査内容 今回の調査はあけぼの道路（高知市～土佐山田町）建設工事に伴うものであり、平成6年度、南国市小籠地区から着手し、該当する小籠遺跡では弥生時代前期末の大溝、後期の竪穴住居跡、ピットをはじめ、中世においては溝、掘立柱建物跡、近世では六道銭・近世陶磁器片を伴う近世墓、産業用と思われる土坑、井戸など多種多様にわたり検出されている。当該遺跡を含む長岡台地上には多期にわたる数多くの遺跡が立地しており、発掘調査例も多いが、今回の調査を実施した陣山地区周辺は未だ発掘調査は実施されておらず全容が把握しきれていない地域であった。

調査の結果、調査対象地の北部において近世の溝、溜め池施設、土坑、ピットなどが多数検出された。遺構検出面は地山の礫層及び褐色土上面であり、これらの地山は幅20mで南北に起伏をもちながら交互に堆積している。溜め池施設は、平面プランU字型であり、遺構の北側にある東西方向の溝から幅20cmの導水路を接続している。池状を呈した掘込み部縁辺には直径40～50cm大の円礫を2・3段積んでおり、根石にあたる石下には直径8cmの胴木を敷いている。池の深さは、1.20m前後を測り、埋土中より、近世陶磁器、瓦、石製品、銅製品などが多量に出土した。また、直径1.5m前後の円形で、周囲を厚さ5～7cmの三和土で固めてある土坑や、直径10cm前後を測る円礫を周りに積み上げ、さらに三和土で固めた土坑が5基検出されている。これらの土坑は、先述した小籠遺跡でも確認されており、水に関わる（染色など）近世の産業土坑と考えられているが、今後、土坑の形態の時期差、性格、及び分布状況を把握しながら詳細に検討してゆく必要がある。

出土遺物については現在、整理中であり明言はさけたいが、主に18世紀の近世陶磁器（肥前産）をはじめ、在地窯産尾戸焼・能茶山焼の陶磁器が中心に出土している。その他、包含層中から土師器・須恵器・土師質土器の細片が出土しているがその量は僅少であり詳細は現段階では明確でない。

また、今回の調査対象地内には第二次大戦中の高知海軍航空隊の通信部門を受け持つ「陣山送信所」の敷地の一部がかかっており、南部の調査区拡張中に耕作土直下で送信所の北東部を区画する溝跡が検出された。この陣山送信所は戦後、占領軍による香長平野の日本軍の武装解除作業の際、銃、砲、弾薬などが集められ、敷地内において武器弾薬の解体作業中に爆発事故（1945.11.19）が起きている。その影響により周辺地域には大量の武器弾薬が飛散しており、今回の調査では表土掘削中に排土から砲弾、機関砲の弾などが多量に発見された。調査対象地の南半分は、送信所建設のため地山が深く攪乱されており、遺構も残存していない。奇しくも戦後50年目の今日に改めてその事実が甦った。



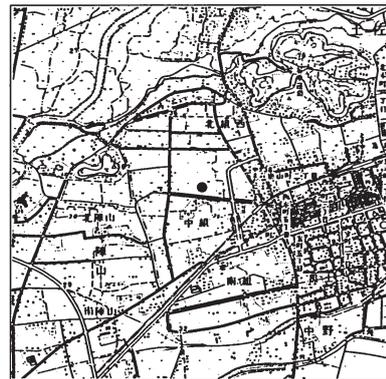
池状遺構検出状態



発見された砲弾

やまだ みつまた
山田三ツ又遺跡 (95-15 RYY)

1. 所在地 土佐山田町中組867
2. 立地 更新世形成扇状地上
3. 時代 江戸時代
4. 調査期間 平成7年8月23日～12月26日
5. 調査面積 4,300m²
6. 担当者 佐竹寛・藤方正治
7. 調査内容 山田三ツ又遺跡はこれまで中世の遺物散布地として捉えられてきた遺跡である。



今回あけほの道路敷設に伴い調査を実施したが、調査区は便宜上Ⅰ～Ⅲ区に分かれている。

調査Ⅰ区では近世のものと考えられる柱穴群が検出されている。これらは長岡台地形成当時に堆積した礫層部分に多く検出されており、この礫層を掘り抜いて存在している。平面形は直径50cm～1mの円形または不整形円形を呈し、深さは50～70cmを測り、中には1mに達するものも存在した。掘立柱建物群を構成するものと考えられる。

調査Ⅱ区では掘立柱建物群を構成すると考えられる柱穴群が多く検出されており、これと切り合う形で土墳墓・土坑が存在している。柱穴群はⅠ区と同様残存状態は良好であるが、幾度かの建て替えが行われたものと考えられる。土墳墓は埋土の上位に拳大から人頭大の円礫を含む場合が多く、底部には桶の底跡と考えられる小溝が存在している。土坑は側壁及び底部に三和土による枠を持つものが多く、平面形態は直径約1.5mの円形のもの、長軸約2.0mの楕円形又は隅丸長方形のもの、一辺約1.2mの隅丸方形を呈するものが存在している。遺物の中には包含層から出土した竜泉窯青磁の碗底部など、三ツ又遺跡の主体を成す時代の遺物がいくつか見られるが、多くは近世のものである。磁器では在地（能茶山産）のものも見られるが、肥前産が主体を占めるようである。陶器では尾戸産の椀が溝等の遺構内から多く出土している。

調査Ⅲ区は遺構の存在が稀薄であり、溝・柱穴・土墳墓・三和土土坑・性格不明土坑が検出されている。時期は近世のものと考えられる。

長岡台地上に展開した近世集落の一形態を示すものである。



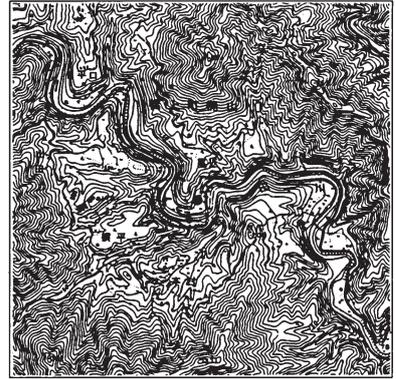
三和土土坑出土状況



土墳墓完掘状況

くすやま
楠山遺跡 (95-11 SK)

1. 所在地 宿毛市橋上町楠山字五助山
2. 立地 松田川上流段丘上
3. 時代 旧石器・縄文時代
4. 調査期間 平成7年7月17日～11月29日
5. 調査面積 1,870m²
6. 担当者 森田尚宏・宮地早苗・松田知彦



7. 調査内容 楠山遺跡は、松田川の上流域、河口の宿毛市から約20kmに位置しており、左岸の河岸段丘上から山麓部にかけての立地である。調査の目的は坂本ダム建設に伴う緊急調査であり、約2km下流の池ノ上遺跡とともに平成5年度から継続的に調査が実施されている。平成5・6年度に試掘調査と一部の本調査を行ない、本年度に全面の本調査を実施し現地調査を終了した。

調査は、段丘面上から山麓の斜面裾部を対象として行われた。調査手順としては、調査対象区の中央に工事用仮設道路が存在することから、仮設道路から東側の松田川寄りをⅠ区として着手し、Ⅰ区終了後に西側の山裾部をⅡ区、その北側をⅢ区として調査を進めた。Ⅰ区では耕作土直下に橙赤色の火山灰層がみられ、アカホヤ火山灰と考えられた。火山灰層と下層の3層黄褐色粘質土は小砂利を含む不整合面であり、遺物は不整合面以下から出土している。段丘端部では火山灰層上に土壌化した黒色土がみられるが3層の堆積は薄く、段丘礫層が検出される。山麓部側では3層下にシルト層及び砂層がみられた。遺物の出土状況は全般的にみれば散在しており、集中性に欠けている。しかし、Ⅰ区の南半部ではチップの集中が1ヶ所と仮設道路に接して上層の遺物包含層から約30cmの無遺物層下に小規模な集中が検出されている。

Ⅱ区では、表土下のアカホヤ火山灰層が薄くなるが、3層黄褐色土以下の土壌の堆積が厚く、遺物の出土最終面は地表下約2.5mであった。アカホヤ火山灰の下層30cmには黄褐色の火山灰層が確認され、分析の結果始良火山灰(AT)であることが判明した。遺物の出土状況は、山裾部寄りでは僅かに散布するのみであるが、中央部付近では約300点の遺物集中地点がみられ、原位置を保つ遺物群であると考えられた。出土層位からすればAT面のほぼ直上と考えられ、高知県内では初めて旧石器時代の遺跡として火山灰層と出土遺物の層位的関係をつかむことができた。遺物集中範囲は3×2mの範囲であり、大形の剥片と石核が中心である。定型的な石器がほとんどみられないことからすれば、やはり石器製作跡と考えられ、松田川で容易に入手できる頁岩を使用している。Ⅲ区の出土遺物は少量であるが、AT層の下層から出土する剥片もあることから、一部の遺物はAT降灰以前と考えられるが、接合関係等の整理作業の進行により、Ⅱ区の集中遺物との関連性をも検討することにより判断できるものとする。

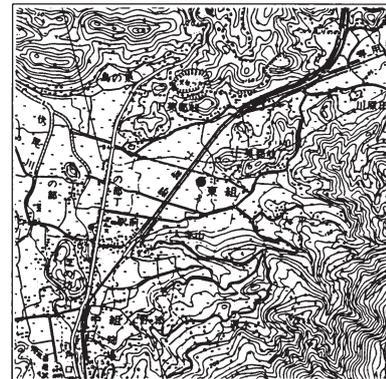


Ⅱ区 遺物出土状態

かみみつき

上美都岐遺跡 (95-22 KM)

1. 所在地 高岡郡佐川町東組字上美都岐
2. 立地 幸田川右岸の沖積地
3. 時代 弥生・奈良～江戸時代
4. 調査期間 平成7年10月16日～平成8年1月16日
5. 調査面積 2,818m²
6. 担当者 廣田佳久・田上浩



7. 調査内容 当遺跡は、斗賀野地区県営圃場整備計画に伴って平成3年度に実施した事前の試掘調査によって確認された遺跡である。試掘調査の時には方形の掘方を持つ柱穴が確認され、調査部分の地名（ホノギ）が「コクガ領」であったことから官衙に関係した遺跡ではないかとみられていた。

調査の結果、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明した。最も古い遺構は弥生時代後期初頭のもので、長辺2.20m、短辺0.55m、深さ0.35mの舟形土坑が確認され、擬凹線文が施された甕が出土した。また、弥生時代後期後半の竪穴状遺構も確認された。この竪穴状遺構は長辺2.80m、短辺2.50m、深さ0.25mで、2本柱で棟を支える簡単な構造であったものと考えられ、北側の床面が一段高くなったベット状遺構になっていた。

次の時代は、奈良時代後半から平安時代初めにかけてのもので、方形の掘方を持つ掘立柱建物跡と堀跡が確認された。これらの柱穴は方形の掘方で構成されていることから一般の住居ではなく規格性を持った官衙（役所）に関するものではないかと考えられる。遺構からの出土ではなかったが、刻書土器が発見された。県内では数少ないもので、土師器に刻まれたものは今回が初めてである。このことから単に一般の住居とは考え難く、官衙（役所）に関連したものとみた方が良さそうである。さらに、先述のように現在の地名にも「コクガ領」という「国（土佐国）の領地」という意味の名が残っていることから官衙（役所）に関係した遺構と考えた方が状況に即しているようである。ただし、遺構の中心は調査区の南側ではないかと考えられる。

鎌倉時代の遺構も確認されており、溝に囲まれた中に多数の掘立柱建物が復元できた。遺構の性格については現在検討中であるが、輸入陶磁器や瓦器などの搬入品が数多く伴出しており、単なる住居跡ではなさそうである。

最も新しいものでは、18世紀後半以降のものと思われる住居跡も確認されている。石組の井戸跡が発見され、当時の様相を垣間見ることができる。また、建物跡はすべて掘立柱建物跡であり、江戸時代後半になっても礎石建物にならず、根強く古くからの形態が残っているものとして注目される。



発掘調査区全景（上空より）

そが 曾我城跡 (95-18 SC)

1. 所在地 幡多郡大方町浮鞭城ノ谷口843～873
2. 立地 丘陵
3. 時代 中世
4. 調査期間 平成7年9月25日～12月12日
5. 調査面積 1,081m²
6. 担当者 山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜



7. 調査内容 曾我城跡は、大方町内の湊川下流域の右岸に向けて、丘陵の一部が細長く南東方向に派生した場所に立地している。両サイドは深くまで谷が入り込んでおり、他の丘陵とは分けられ、独立したような地形を呈している。この地形的特徴をうまく利用して山城を形成している。町内の山城の分布は、6つの各中小河川沿いに分布していることが看取できる。湊川沿いは、古代の窯跡や南北朝期における主要人物の拠点地が存在するなど、物の生産・流通という経済活動が盛んな地域であることが窺える。このことは、歴史上の主要舞台であったことを物語っていると同時に、一条氏等の政治的背景・社会変動にも注目しなければならない。これらに加え、曾我城跡は、その位置・規模・縄張り等で注目し得る山城である。

今回の調査は、試掘調査の結果報告にもとづいたヤモウジ団地農地造成工事の範囲内で、影響を受ける部分について全面調査を行う予定であった。しかしながら、調査途中で山道沿いに水道管が埋設されていることが判明し、調査途中で中断することを余儀なくされた。調査範囲は尾根側の(平坦部1～4)から2郭へ、更には詰(土塁)に至るまでの曾我城跡の防御上で最も重要な部分であり、その解明は西南四国の山城の在り方を示す一つの指標となろう。注目すべき箇所としては、細長い尾根の効果、その尾根に段差をもたせ、その先端部に堀切を入れる技術、南側斜面に階段状に平場を設ける等をあげることができるが、今後の調査や更なる検討が必要である。

曾我城跡の機能した時間は、概ね15世紀後半から16世紀前半と考えられる。今回検出した遺構・遺物等についてふれると、遺構では、堀切一条・堅堀状遺構1条を検出した。堀切は表土層直下ですぐに地山面となった。断面を確認すると、下底が壊されているものの、ほぼ薬研堀(V字状)で間違いのないと考えられる。その上、2郭(城の本体側)を高く、しかも傾斜をきつくする等の工夫



調査区風景

をこらしている。堅堀状遺構については、上部しか検出していないので現段階では何とも言えない。犬走り状の平場を持っていたり、規模等を含めて再度検討の余地がある。他に土坑を3基検出したが、その性格はわからない。遺物については、その出土量は少ない。このことは調査が城の中心部分から外れていると同時に、城の機能や性格、又は存続期間や争いの有無、更には後世の削平をかなり受けている点を考えなくてはならない。

こうち 高知城跡 御台所屋敷跡史跡整備北石垣 (95-24 KC)



1. 所在地 高知市丸の内
2. 立地 独立丘陵
3. 時代 中世～近世
4. 調査期間 平成7年11月22日～平成8年1月6日
5. 調査面積 120m²
6. 担当者 森田尚宏・吉成承三・曾我貴行

7. 調査内容 高知城跡は高知市街中心部に位置する城郭跡で、江戸時代においては土佐藩主山内氏の居城であった。城跡及び建造物は現在、国の史跡・重要文化財に指定されている。今次の調査対象地は城内の高知市立動物園の跡地であり、絵図等に「御台所屋敷」と記載された場所である。「御台所屋敷」跡に関しては、史跡公園としての整備事業に先立って、平成5年度以来2ヶ年にわたる埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきた。そしてこれらによって、中世に遡る遺構・遺物や近世初頭の遺構群等の存在することが確認されていた。

本年度の調査は、史跡整備事業の一環として実施された御台所屋敷跡北面の石垣の改修に際して、石垣内部の裏込めの状態、及び土層堆積状況等の記録採取を目的としたものである。解体前の石垣の規模は、東西の長さ約30m、高さ約8mであった。また、石垣の西端部約10mの部分とこれ以東の部分とは、石材の大きさや積み方が明らかに異なっており、その境界点では、東からの石垣が一旦終結しているかのようにみえていた。

調査の結果、まず石垣の積み方が変化している地点では、ここから南方向へと屈折した石垣が確認された。このことから、北面石垣は本来この地点までのものであり、西端部分は後に追加されたものであることが判明した。この事実はいくつかの城絵図の記載と符合する。また、ここからやや東側の地点での石垣断面の調査によって、石垣内部の裏込めの栗石層の幅は約2mであり、その南側（内側）は盛土によって形成されていることが確認できた。盛土中には焼土・炭等を含む土層があり、その出自については高知城の大火との関連が考えられる。以上2箇所の断面調査の成果は、御台所屋敷跡北面石垣の構築年代を検討する上での決め手となるものであり、さらに多くの示唆を含むものと評価できる。

また、石垣の基部（根石）確認のために基部周辺を調査したところ、近世末から近代初め頃の形成とみられる大量の瓦の集積地点が検出された。遺物の詳細な検討を経てはいないが、集積地点が「八幡宮」跡の一隅にあたることなどから、「八幡宮」社殿建物との関連が予想される。

本年度の調査では、御台所屋敷跡の形成年代特定のカギとなる貴重な情報を得ることができた。加えて八幡宮跡に関する豊富な出土資料にも恵まれた。今次も含めた史跡整備事業関連の調査成果は、今後の高知城の調査・研究に際して重要な役割を果たすものとなるだろう。



北面石垣屈折部分断面（西より）

ひえはいじ
比江廃寺跡 (95-14 NH)

1. 所在地 南国市比江
2. 立地 国分川右岸の微高地上
3. 時代 白鳳・奈良・平安時代
4. 調査期間 平成7年7月24日～9月7日
平成7年11月6日～平成8年2月23日
5. 調査面積 1,250㎡
6. 担当者 山本哲也・松田知彦（高知県教育委員会）



7. 調査内容 昨年度に引き続き比江廃寺跡の遺構等確認調査を実施した。当寺院跡は白鳳期創建の古代寺院跡で塔心礎が遺存し、塔跡は「比江廃寺塔跡」として昭和9年1月22日（昭和57年5月21日追加指定）に国史跡に指定されているがその他の伽藍配置については未確認である。県教育委員会では、当センター及び南国市教育委員会の協力を得て遺構等の内容確認のための計画的な発掘調査を平成6年度から実施していた。本年度は、塔跡東側の製紙工場跡地と西側の田地及び塔跡（史跡指定地）について調査を実施した。

製紙工場跡地では昭和17年の建物建築時に多量の瓦類が出土し、平成元・2年度の調査でも瓦溜状の遺構の存在が確認されている。このため、今回の調査では瓦類の出土に関連した遺構等の所在確認を行うとともに、金堂等の主要伽藍にかかわる掘込地業痕などの存在の有無についての再確認を行った。調査の結果、寺院関連遺構は検出されず遺物の出土も僅かであり、金堂等の主要伽藍の存在を裏付ける資料は得られなかった。また、旧地形としては西側から緩やかな下り勾配をもった傾斜地が復元され、塔は南東方向に張り出した段丘端に構築された可能性がある。

塔心礎の調査では、昭和44年の調査成果を基に基壇の痕跡や掘込地業の内容などについて確認を行った。その結果、塔心礎の据え付け痕を確認し、心礎は原位置を保っていることが再確認された。心礎は通常みられる方形掘込地業の中心に据えられたものではなく、砂礫層と粘質土の地山を掘削して据えつけた後、粘質土層の地山側について版築状に叩き締めていた。塔心礎は地下式心礎であることが確認できたが、後世の削平のため基壇等の上部構造については不明である。なお、据え付け痕の締土には瓦片・土器片（須恵器片）が含まれており、出土遺物から8C前半（奈良時代前半）にかけて塔が建立されていたことが考えられる。

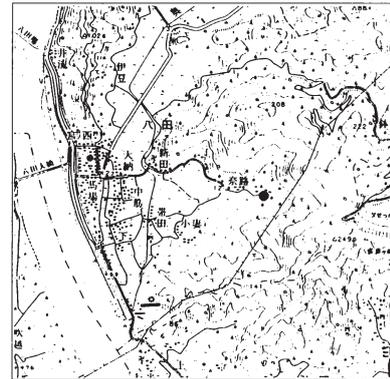
塔跡西側では中世の屋敷跡が確認され、堀跡とみられる根石列・井戸跡等が検出されたが、寺院関連遺構は検出されなかった。しかし、西北の田地から今回初めて礎石建物跡・掘立柱建物跡・柱穴等の関連遺構が検出され、出土遺物から塔とほぼ同時期に形成された遺構であると考えられる。建物跡の性格等については、さらに西側に調査区を拡幅して判断される必要があるが、主要遺構の検出により重要な成果を得ることができた。



掘立柱建物跡

いのちようはたちく
伊野町八田地区 (95-20 IH)

1. 所在地 吾川郡伊野町八田
2. 立地 尾根に挟まれた谷部の緩斜面・低湿地
3. 時代 縄文時代～近世
4. 調査期間 平成7年9月～平成8年3月
5. 調査面積 1,500m²
6. 担当者 坂本憲昭・江戸秀輝



7. 調査内容 伊野町八田地区の調査対象地域は伊野町と春野町の町境の近くの緩斜面と低湿地に位置する。この調査は、四国横断自動車道建設工事に伴う事前の試掘調査で、遺跡の存在の有無を確認し、本調査の基礎資料を得ることを目的として実施した。

今回の調査では3件の遺跡が確認され、それぞれ、八田奈呂遺跡・八田栃谷遺跡・八田神母谷遺跡とした。八田奈呂遺跡は尾根に挟まれた緩斜面に位置し、遺構は弥生時代の土杭・溝・柱穴、中世の土坑・溝・柱穴・集石等、近世の土坑・溝等が検出された。出土遺物は弥生時代後期の甕、古墳時代～古代の須恵器・土師器等、中世の土師器・瓦器・陶磁器等、近世の陶磁器等である。ここは長い時代に渡って集落が存在したと考えられる。八田栃谷遺跡は尾根の連なった丘陵の北川に位置し、弥生時代中期から後期、古墳時代初頭の土器が多量に、中でも高坏が集中して多く出土しており、他に、手捏ね土器、小型丸底壺等が出土した。この部分については出土状況からもみて何らかの祭祀遺構であると考えられる。谷の出口にあたる事から、その関係のものではないだろうか。丘陵の直下から若干離れると、弥生時代から近世までの遺物の出土がそれぞれの土層からあった。八田神母谷遺跡は尾根と丘陵に挟まれた谷部に位置し、遺構は縄文時代後期の土器が出土した近くに焼土を伴う土坑を検出した。他に時代は不明だが流路の跡と思われるものを検出した。遺物は、縄文時代後期・晩期の鉢・石器、弥生時代前期から後期までの各種土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦器・陶磁器等が出土している。出土状況等を考えると祭祀遺構の存在の可能性をもっている部分もある。

今後、本調査が行われることにより、これらの遺跡の内容・性格が明らかになり、集落の存在や祭祀遺構の存在が証明されていくと共に、それぞれの時代の自然環境・地形等が姿を現わし、これら3遺跡の関連性も知ることができるのではないだろうか。



遺物出土状況



遺物出土状況

すさきどうろ
須崎道路確認調査 I・II (95-4 SD 1・2)

1. 所在地 須崎市吾井郷・神田
2. 立地 桜川下流域・沖積地
3. 時代 縄文・古墳～中世
4. 調査期間 平成7年5月22日～6月2日
11月9日～11月30日



5. 調査面積 822m²

6. 担当者 森田尚宏・田坂京子

7. 調査内容 須崎道路は、国道56号線における朝夕の通勤ラッシュの解消並びに須崎市までの四国横断自動車道の建設にあわせた高規格道路建設の事業を受けて計画された。須崎市吾桑から市街地を抜け、新莊川に至る路線計画の中で国道分岐から県道浦の内線までの間が最も遺跡の存在する可能性が高いと考えられたのでこの区間を対象として事前の確認調査をすることとなった。

建設省の工事の都合上、国道分岐からJR土讃線間をI区、JR土讃線交差から県道浦の内線をII区として、二次にわたって調査を実施した。調査に際しては現地の状況に応じた任意の位置に54個のグリッドを設定し試掘調査を行った。試掘グリッドは基本的に4mグリッドとし、重機の入らない所は2mグリッドにして、人力による掘り下げとした。

I区は17個のグリッドを設定した。いずれのグリッドからも遺構は検出されなかったが、6個のグリッドから遺物の出土が確認された。G1・2・7・8からは、中世を中心として土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、須恵器等が主に流れ込みによる堆積で出土している。G9からは、古墳時代の桜川旧河川流路の一部と考えられる溝跡(SR-1)がⅧ層下面より検出され、39点の土師器、9点の杭、鋤状木製品、加工木片等が出土している。

II区はG18以下19個のグリッドから遺物が出土している。G22・27では中世段階と考えられる杭列が検出され、G51では曲物の底板が出土している。他のグリッドでは層位に違いはあるもののⅢ・Ⅳ層を中心に土師質土器等中世の遺物が、Ⅴ～Ⅷ層では土師器、須恵器を出土していることから、古墳時代と中世の二時期の堆積を確認することができた。

従来、桜川の流域には、小規模な遺跡が山裾部に断続的に立地しており、その周辺には中世山城跡が存在しているが、下流域は須崎湾に面した湿地帯であることから遺跡は存在しないと考えられてきた。しかし、今回の調査で、下流域にも分布密度は低いながらも遺跡の散布が広範囲に広がっていることが判明した。出土遺物および杭列の存在から、この辺り一帯は古墳時代と中世における水田耕作などの生産の場であり、これに関する集落の存在も考えられる。さらに調査が進めば当地域における弥生時代から中世にかけての歴史的発展の解明が進むものと期待される。



鋤状木製品

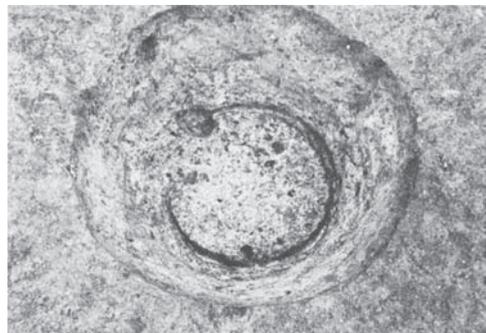
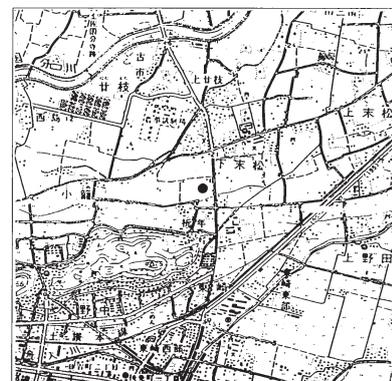
とさし 土佐市バイパス確認調査 (95-10 TB)

1. 所在地 土佐市高岡町林口・天神・犬ノ場
2. 立地 火渡川中流域の沖積地
3. 時代 弥生・奈良時代～江戸時代
4. 調査期間 平成7年6月19日～平成7年7月15日(第1次)
平成8年3月11日～平成8年3月14日(第2次)
5. 調査面積 550m²
6. 担当者 廣田佳久・小嶋博満・田上 浩
7. 調査内容 建設省が高知自動車道のアクセスとして計画している土佐市バイパス建設に伴う確認調査である。当該区域には林口遺跡の存在が知られていた以外に周知の遺跡は確認されていなかったが、周辺部には犬ノ場窯跡等の遺跡が存在することから当該区域内にも遺跡が所在する可能性が考えられたため事前の確認調査を行なった。その結果、新たに2遺跡(天神遺跡、犬ノ場遺跡)を確認した。これら遺跡は弥生時代、古代～中世を中心とする遺跡で、林口遺跡と合わせると工事区域内に約30,000m²の遺跡が所在することが判明した。本調査は平成8・9年度の2ヶ年をかけて実施することになっており、吾南平野の歴史解明に繋がるものと考えられる。



しもすえまつ 下末松遺跡 (95-7 RNS)

1. 所在地 南国市下末松字久保屋452他
2. 立地 更新世形成扇状地上
3. 時代 江戸・明治時代
4. 調査期間 平成7年5月29日～6月7日
5. 調査面積 1,100m²
6. 担当者 佐竹寛・藤方正治
7. 調査内容 遺構は調査区の北部と西部に於て主に検出されている。土坑は5基存在している。SK4・5は土壙墓と考えられ、平面形は直径1.1～1.3mの円形を呈し、断面形は逆台形である。SK4の底部には幅5cm、深さ4cm程度の溝が存在しており、端部を全周する。埋葬に伴う桶の底跡と考えられる。SK5底部から釘と考えられる鉄製品や18世紀代肥前産の磁器碗が出土している。掘立柱建物跡にはSB1・2が存在している。いずれも、3間×1間の規模を持つものであり、各柱穴の平面形は直径約30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。遺構・遺物の存在は稀薄であるが、17世紀後半代からの遺跡と考えられる。



SK4 完掘状況

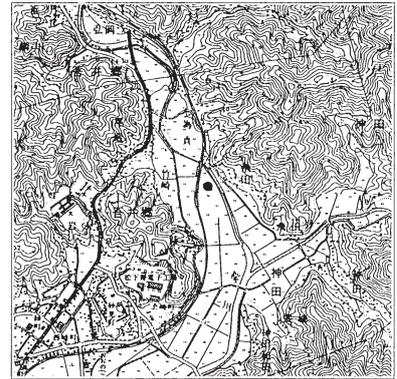
いずれも、3間×1間の規模を持つものであり、各柱穴の平面形は直径約30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。遺構・遺物の存在は稀薄であるが、17世紀後半代からの遺跡と考えられる。

かんだちく
神田地区確認調査 (95-28 SBK)

1. 所在地 須崎市神田字神母ノ内
2. 立地 桜川・沖積他
3. 時代 古代～中世
4. 調査期間 平成7年12月1日～平成8年1月17日
5. 調査面積 300m²
6. 担当者 小嶋博満

7. 調査内容 神田地区は、近くに飛田坂本遺跡が位置し、桜川の対岸には弥生時代中期末の青銅器（銅銚）が出土している。また、東の山腹には中世の角塔婆もあり、その時期は明確である。

調査対象地は、飛田坂本遺跡の西側に位置し、古戦場であったと伝えられる所であり、桜川の氾濫原になっている。桜川の氾濫は繰り返されているため、流路は現在の東側に寄せたものとなっている。今回の確認調査では、古代の須恵器である長頸壺と中世の木製の椀が出土している。また、各トレンチからは木製品等が出土するなど、遺物が確認されたものの全体的には出土量は少なく、明確な遺物包含層や遺構等の検出には至らず、流れ込みの遺物と考えられる。

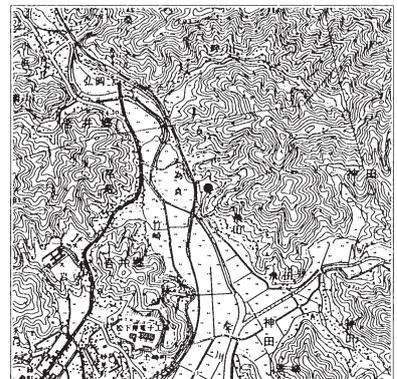


調査対象地 遠景

ひださかもと
飛田坂本遺跡 (95-31 HS)

1. 所在地 須崎市神田飛田字坂本
2. 立地 桜川左岸・谷部
3. 時代 縄文時代～中世
4. 調査期間 平成8年1月18日～3月29日
5. 調査面積 800m²
6. 担当者 小嶋博満

7. 調査内容 今回の試掘調査は、四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴い工事予定区域内に所在する本遺跡の範囲及びその内容等を確認するために実施された。調査対象地には任意の位置に18本のトレンチを設定し、基本的には5m×5mとして重機及び人力で掘り下げを行い、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、トレンチのTR8とTR12において遺構が確認され、TR8では柱穴及び自然流路、TR12では柱穴と溝が検出された。遺物については、TR2から縄文時代晩期の土器片2点、TR8・12では土錘が各1点等が出土しており、縄文時代から中世にかけての遺物が確認されている。時期的には12世紀後半～13世紀後半の青磁椀（龍泉窯系）及び和泉型瓦器椀が一定量認められ、遺構の時期としても中世（鎌倉～室町時代）と考えられる。さらに、今後の本調査によって遺跡の時期、性格が明確になるであろう。



調査区全景

はた いげだに
八田神母谷遺跡 (95-34 IHI_B)

1. 所在地 伊野町八田神母谷
2. 立地 山地と低丘陵に挟まれた谷部
3. 時代 縄文時代後期～中世
4. 調査期間 平成7年12月1日～平成8年3月31日
5. 調査面積 2,500m²
6. 担当者 山本哲也・松村信博・坂本憲昭



7. 調査内容 八田神母谷遺跡は、四国横断自動車道建設に伴ない実施された試掘調査によって発見された遺跡である。当遺跡は仁淀川河口近くの左岸から約500m入った谷部に立地する。この地域は仁淀川の大洪水がひとたび起こると水没していた場所で、遺跡の確認は不可能でないかと考えられていたが、山ぎわを中心に遺物の分布が大きく2箇所に分れてあることが確認された。本年度は、古墳時代、弥生時代、縄文時代の3つの包含層が確認された調査区北側をB地点として古墳時代の層約2,500m²を調査することとなった。出土遺物は中世では東播系の捏鉢の口縁部片が出土する。また古代の須恵器甕も出土するが少量である。注目される遺物としては高知平野では最も古いと考えられる5世紀半ばの須恵器壺が完形で出土していることである。また小型丸底壺、器台、甕が集中して出土する地点があり、本遺跡の立地から関連の祭祀遺構でないかと考えられる。調査は8年度も継続して行われる予定であり、今後の成果が期待される。

まつのき
松ノ木遺跡 (95-9 MMIV)

1. 所在地 長岡郡本山町寺家
2. 立地 吉野川上流左岸中位段丘縁部
3. 時代 縄文～古墳時代・中世
4. 調査期間 平成7年4月1日～5月10日
5. 調査面積 100m²
6. 担当者 前田光雄



7. 調査内容 今回調査は、平成6年度からの縄文時代後期の「土器捨て場」の調査を平成7年度に引き続き継続的に発掘を行ったものである。縄文時代後期の土器及び石器は、前年度の出土量を合わせてコンテナケース100箱程となり、多量の遺物が出土している。今回の調査をもって一連の学術調査は終了する予定であり、今後、松ノ木遺跡の評価と位置付けを行うための総まとめの作業に取りかかっている。

今回の調査で注目されるのは小形壺の出土である。器高は10cm足らずであり、小さな穴の開いた耳が2個付いている。高知県では東津野村で採集されたものと同様の壺である。



遺物出土状態

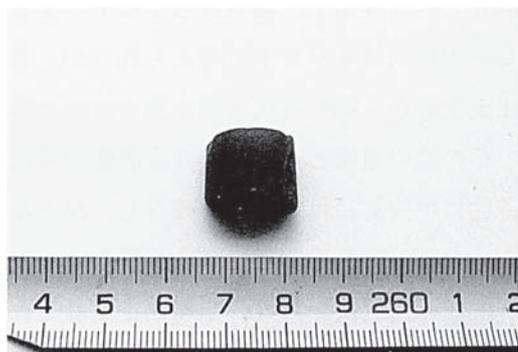
おながわ

女川遺跡第1次調査 (95-26 OGI)

1. 所在地 高岡郡越知町女川
2. 立地 河岸段丘
3. 時代 縄文・弥生・中世・近世
4. 調査期間 平成7年12月5日～12月21日
5. 調査面積 46m²
6. 担当者 曾我貴行



7. 調査内容 女川遺跡は仁淀川右岸の中位段丘上に位置する遺跡で、土器・石器が多数表面採集される縄文時代遺跡として知られていた。本次調査は遺跡の範囲確認を目的としたもので、越知町が実施した初の埋蔵文化財発掘調査である。約2m四方の調査区11箇所を調査した結果、縄文時代後期の土坑状遺構、中世のピット状遺構等が検出され、縄文土器、弥生土器、土師質土器や石器、ガラス製品等が出土した。中でも弥生時代のものとみられるガラス製品は、直径1.6cm、全長1.4cmを測る半円筒状のもので、形態的には現時点で国内に例のない、注目すべき資料である。



第1次調査出土ガラス製品

おながわ

女川遺跡第2次調査 (95-36 OG II)

- 1・2. 同上
3. 時代 縄文・中世・近世
4. 調査期間 平成8年2月16日～2月29日
5. 調査面積 175m²
6. 担当者 曾我貴行

7. 調査内容 個人住宅建築に伴う発掘調査である。検出遺構は中・近世のピット状遺構約50基、出土遺物は縄文土器、土師質土器、土錘、陶磁器等である。近世のピット状遺構25基は東西約4m、南北約2mの間隔の整然とした配列をなすが、性格は不明である。本次調査区は女川遺跡の中近世の遺構分布域にあたるものと考えられる。

おながわ

女川遺跡第3次調査 (95-37 OG III)

- 1～3. 同上
4. 調査期間 平成8年3月4日～3月16日
5. 調査面積 207m²
6. 担当者 曾我貴行

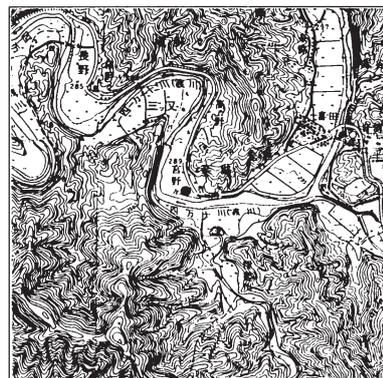
7. 調査内容 町道建設に伴う発掘調査である。検出遺構は縄文時代の土坑状遺構、ピット状遺構各1基、中世～近世のピット状遺構約50基で、出土遺物は縄文土器、土師質土器、備前焼、石鏃等である。縄文時代の遺構面の広がり、中・近世の遺構の偏在傾向が掴めたことは重要である。



第2次調査遺構完掘状態 (東より)

みやのの
宮野々遺跡第2次調査 (95-23 OM 2)

1. 所在地 高岡郡大野見村宮野々
2. 立地 四万十川右岸の川岸段丘上
3. 時代 弥生～古墳時代
4. 調査期間 平成7年11月6日～12月26日
5. 調査面積 750m²
6. 担当者 松田知彦 (高知県教育委員会)



7. 調査内容 当遺跡は、四万十川の上流域、標高290m前後の河岸段丘上に立地している。段丘面は最大幅150m、全長500mほどであり、四万十川からの比高差は約5mである。調査は平成6年度より国庫補助事業として行われ、本年が最終年度となる。

今次調査では、四万十川中～上流域では初例となる弥生時代の竪穴住居跡を確認した。平面プランはほぼ円形で、直径約9m、深さ約50cm。中央部には、焼土及び炭化した木材が残存する。確認調査という性格上、掘りきらずにそのまま保存したため、中央ピットの形状等については不明である。支柱穴は4～6本と考えられるが、詳細は今後の整理作業の結果を待ちたい。この住居跡は、出土土器から弥生時代後期中葉～後半と考えられる。

その他の遺構として、竪穴住居跡の可能性を有する、円形プランをもつ遺構が2基存在する。2基共に中央部には炭化物が残存し、埋土及び床面には土器等の遺物があるものの、柱穴が確認できないため、性格不明とせざるを得ない。

上記の住居跡からは、土器が完型品を含めコンテナケース約3箱分出土している。整理途中であるが、甕と鉢が主体となるようである。甕の一つは胴部に意識的に穿孔してある。意図は不明。その他の遺物として、鉄族が出土している。複数の鉄族が癒着した状態で出土しているため正確な数量は把握出来ていないが、3～4点と思われる。形態の判明しているのは、重量が15.2gの三角鏃が1点。及び、重量13.3gの柳葉形鏃が1点で、共にかなり大型に属する。

その他の遺構及び包含層からは、土器がコンテナケース約10箱分出土しており、その中で、神西式土器壺の頸部を確認している。また、スクレイパーと石包丁が各1点出土した。

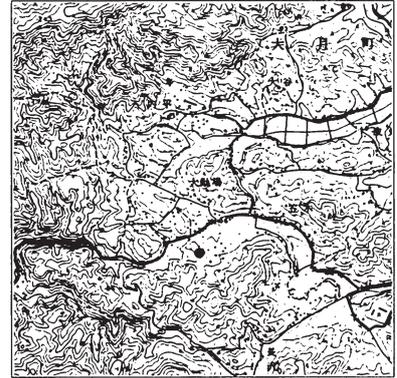
当遺跡は、四万十川中～上流部の古代を考察していく上で重要な位置を占めると考えられるが、これらの土器群の出自等の考察については、類例の増加を待ちたい。



竪穴式住居跡

なしがもり
ナシヶ森遺跡 (95-13 ON)

1. 所在地 幡多郡大月町弘見字ナシヶ森
2. 立地 標高約70～85mの丘陵斜面
3. 時代 旧石器～縄文時代
4. 調査期間 平成7年8月1日～9月27日
5. 調査面積 120m²
6. 担当者 門脇隆（高知県教育委員会）
7. 調査内容 ナシヶ森遺跡発掘調査は、平成5年に樹園造成工事の際にできた土層断面からもたらされた楔形石器や剥片の発見を契機に、平成6年度の一次調査を経て実施されている学術調査である。



平成6年度の調査は標高72～80mの調査対象傾斜地に、2m×2mのグリッドを基本としてT字形のトレンチを設定し、人力のみの手作業で発掘を行った。第Ⅱ層には約10～30cmのアカホヤ火山灰土層が、第Ⅲ層には約10～50cm程度の明黄灰色粘質砂礫土層が堆積しており、いずれの層においても石器類が確認できた。2,580点にもものぼる多量の石器類が出土し、完掘したトレンチの下には、出土した石器類の原材である珪質頁岩の岩盤がⅣ層として姿をみせ、本遺跡が石器原産地遺跡であることを裏づける貴重な出土資料となった。しかし、この時点では製品となる石器が極めて少量で、遺跡の時代を確定させる示準となる石器を確認することはできなかった。

今次調査ではこの成果と課題を踏まえ、出土資料の大半を占めたトレンチ西側以西及び削平された山頂部に100m²の発掘調査を実施した。その結果、発掘範囲の西端部標高76.7m地点から基部がわずかに欠損はしているものの、槍先として使用されたとされる珪質頁岩製の木の葉形尖頭器が1点出土した。この尖頭器は、縄文時代草創期から早期にかけてのものと推定される。また、大半の土をふるいにかけて詳細な調査を継続した結果、多数の楔形石器とともに石鏃も出土した。この事実から、高知県下の縄文時代早期の遺跡には十和村の十川駄場崎遺跡のように楔形石器が特徴的に認められ、本遺跡でも同様であることから、ナシヶ森遺跡は縄文時代早期の珪質頁岩を原材とする石器生産のための原産地遺跡である可能性が高くなった。

また、丘陵斜面を北側に降った本遺跡のB地点は平坦な小丘陵地となっており、煙草栽培の耕作によって多くの珪質頁岩の剥片や姫島産黒曜石の原石や石鏃、剥片等が表採できる。過去にはナイフ形石器も2点表採されている注目地点であり、今次は4ヶ所20m²の試掘調査を試みたが、ナイフ形石器に関連する頁岩製の横長剥片をはじめとして、姫島産黒曜石や頁岩等の石器製作に伴う剥片が数点出土し、丘陵南域部は赤ホヤ火山灰土層下の土層も残りが良好で今後の調査に期待がもてる。

けら 介良遺跡 (95-21 KK)

1. 所在地 高知市介良字仁王溝・字竹端・字重枝
2. 立地 下田川（介良川）水系の沖積地
3. 時代 弥生・古墳・古代・中世
4. 調査期間 平成7年10月16日～11月15日
5. 調査面積 800m²
6. 担当者 田上浩



7. 調査内容 高知市・県の河川改修及び公園整備計画に伴う試掘調査である。対象地は介良川の右岸に接した細長い地域である。対象地のすぐ北側には後期の古墳群で知られる高天ヶ原山があり、更に南側の山沿いには式内社である朝峯神社も立地していることから、付近にはかなり古い時代から人間が住居していたことが予想される。なお対象地は二ヶ所に分かれており、調査順に北側の高天ヶ原山の直下の部分をⅠ区、南側（下流側）の部分をⅡ区とし、Ⅰ区に11ヶ所・Ⅱ区に15ヶ所のTPを設定した。各TP共介良川の水面付近（現地地表下1～1.5m）まで下げると湧水が激しく、その時点で調査を打ち切った。

〈Ⅰ区〉北の山沿いのTPでは、表土の下にすぐ円礫の無遺物層が続き、南側の川沿いのTPでは1m程度の粘質土層を間に挟む。TP-3の粘質土層から弥生時代後期末の土器が出土した。中間に位置するTP-7・9では粘質土の中程に暗灰色の砂層が狭まっており、そこから弥生時代前期末の土器がまとまって出土した。その中には縄文土器の名残と思われる波状口縁を持つものも混じっている。その他のTPでも粘質土層の中から古墳時代から中世にかけての遺物が出土したが、量的にはあまり多くない。いずれの遺物も流れ込みによるものと考えられ、また遺構も検出できなかった。

〈Ⅱ区〉土層の堆積状況はⅠ区とほぼ同様である。粘質土層の下部に円礫が多く混入し、それとともに弥生時代後期末及び古墳時代後期の遺物が出土した。流路沿いではあるが、流れ込みとして片づけるには出土量が非常に多く、特に南端に近いTP-7・8と中央付近のTP-13では量が多かった。TP-13では土器ばかりではなく、竪杵等の木器も出土している。残念ながらその時期の遺構は確認できなかったが、非常に近い位置に集落が存在していたであろうことが推定できる。

古代以降の時期についても、量的には多くはないが上層から出土している。遺物の種類は、布目瓦・中世の挿鉢・土錘・瓦質土器・土師器・貿易陶磁等である。その他破片であるが、TP-13から木簡も出土した。遺構はTP-3において中世のものと考えられる溝跡とピットを検出したが、他のTPからは検出できなかった。



Ⅱ区 TP13 遺構検出状況



Ⅱ区 TP7 遺物出土状況

こうだむくにゅうどう
神田ムク入道遺跡 (95-16 KM)

1. 所在地 高知市神田字ムク入道
2. 立地 鏡川水系の沖積地
3. 時代 古墳時代～中世
4. 調査期間 平成7年8月21日～8月25日
9月11日～10月15日

5. 調査面積 375㎡

6. 担当者 田上 浩

7. 調査内容 本遺跡内で事務所建設の計画が提出されたため、8月に確認調査を実施したところ、中世を中心時期とする遺物が多数出土し、明確な遺構も検出した。そのため9月に対象地のうち遺跡の破壊される建物部分（東西約17m・南北約19mの方形の区画）について、記録保存のための発掘調査を9～10月に行った。以下に調査の概要を述べる。なお、中世以前の遺物も混在していたが、周辺部からの流れ込みとみられる。

(1) 中世の屋敷跡が高知平野西部（高知市域）において初めて確認された。対象地のほぼ全面に200を越える大小のピット・土坑が検出された。ピットは錯綜しており、まだ建物は復元できていないが、かなり長期間に亘って立て替えが繰り返されたものとみられる。ピットの外径はほぼ30～40cmのものが多く、埋め戻しの際に放り込まれたと考えられる割石や土師質土器が多数出土した。なお、柱根の残ったままのピットも2箇所のみられた。また、対象地の東には、ほぼ南北方向に延びる溝跡が四条確認できた。溝跡のうち最も西側のものは対象地南端付近で西方に曲がっており、屋敷地の南東隅を画するものであろう。更に、対象地北端には火を焚いたとみられる箇所があり、焼土と簡単な石組み、土師質土器が集中していた。

(2) 対象地の東北部において石組みの井戸跡が確認された。石組みには石灰岩質の割石（30cm程度）を使用し、開口部の内径は1.2m、底面の内径は0.8m、深さ1.1mを測る。底面中央には曲物を使用した井筒（径0.5m・深さ0.3m）が埋められていた。曲物の使用は県下初例である。井戸は西から2本目の溝を切断する位置にあり、これよりは新しい時期のものであろう。

(3) 中世の完形品を含む遺物の良好な資料が得られた。时期的には13世紀頃～15世紀頃まで出土しているが中心時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。土師質土器が量的に多く、特に溝跡からは完形の坏・小皿が多く出土した。その他に、中国陶磁・瓦器碗・瓦質土器・中世須恵器・国産陶器等も出土している。

(4) 対象面積が狭いので遺跡の全体像は捉え難いが、天正の神田庄地検帳には当遺跡の西方部分に相当する地域に「地頭分」と書かれた屋敷地の記載があり、鎌倉期からのつながりが推定できる。検出した溝跡からみても、屋敷地は今回の対象地から西方に広がっている可能性が高い。また、出土遺物の量や器種等から考えると、ある程度の有力者の屋敷跡の一部と推定される。



井戸跡



溝跡遺物出土状況

こうだむくにゆうどう

神田ムク入道遺跡近接地 (95-25 KM)

1. 所在地 高知市神田字泉川
2. 立地 鏡川水系の沖積地
3. 時代 弥生時代～中世
4. 調査期間 平成7年12月11日～12月15日
5. 調査面積 150m²
6. 担当者 田上浩



7. 調査内容 宅地造成計画に伴う事前の確認調査を行った。ここは埋蔵文化財包蔵地として指定されてはいないが、すぐ南西部分の神田ムク入道遺跡との関連から調査したものである。5箇所のTPを設定した。当初期待された神田ムク入道遺跡との関連としては、対象地ほぼ中央のTP-5において、溝状遺構とそれにほぼ平行してはしる杭列を検出した。包含層並びに遺構内からの出土遺物も神田ムク入道遺跡とほぼ同時期（中世）のものである。

その他の時期についてはTP-3（一部はTP-2）における、弥生時代の遺物である。前期末のものが主体で、約1 km西に位置する柳田遺跡との関連も考えられる。その他に中期末のものも含まれるが、出土状況から考えて明確な包含層とは考えにくい。なお、他のTPを含め、古墳・古代・近世などの遺物も若干出土した。

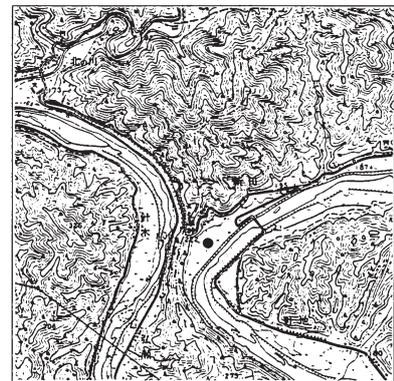


TP3 出土弥生土器

こしのした

越ノ下遺跡 (95-27 KK)

1. 所在地 高岡郡窪川町秋丸越ノ下
2. 立地 四万十川によって形成された河岸段丘
3. 時代 縄文・弥生時代
4. 調査期間 平成7年10月2日～11月9日
5. 調査面積 603m²
6. 担当者 寺川嗣



7. 調査内容 今回の調査は県営圃場整備事業によって影響を受ける越ノ下遺跡について、時代・性格及び範囲等を確認する目的として実施した。この調査により検出された遺物は、縄文土器片、弥生土器片、水晶などで合計36点あまりである。多くは、ローリングを激しく受けており流れ込みによるものと考えられる。越ノ下遺跡は少量ではあったが縄文土器片の出土からも弥生時代よりさらに遡る縄文時代にかけての遺跡であると判明したことは、収穫であったといえよう。

やなぎだ
柳田遺跡 (舟戸 95-12 KY・勝負の川 30 KY 2・榊 35KY 3)

1. 所在地 高知市朝倉字舟戸・字勝負の川・字榊
2. 立地 鏡川水系の沖積地
3. 時代 縄文・弥生・古墳時代
4. 調査期間 舟戸 平成7年7月24日～7月26日
勝負の川 平成8年1月16日～1月19日
榊 平成8年2月19日～2月21日
5. 調査面積 舟戸 75m²・勝負の川 100m²・榊 125m²
6. 担当者 田上 浩



7. 調査内容 柳田遺跡は広範囲に及ぶ遺跡であるが、近年都市化が進み急速に姿を変えつつある。本年度も数件の開発計画があり、そのうちで規模が比較的大きく、遺跡に影響を与えるおそれのあるものについて確認調査を実施した。遺跡の西端に近い勝負の川地区・中央南よりの舟戸地区・中央やや北の榊地区の三箇所であり、それぞれの地区において若干の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。以下、各地区について述べる。なお、最近の客土によって現地表面の標高には違いがあるが、その下の旧地表面の標高は、どの地区もほぼ6 m程度である。

<舟戸地区>三箇所の TP を設定し、それぞれを標高3.5～3.6m位まで掘り下げた。客土層の下には粘質土層が続いていた。粘質土層から土器細片若干と骨片が出土している。

<勝負の川地区>三箇所の TP を設定し、それぞれを標高2.8～3.0m位まで掘り下げた。客土層の下には粘質土層が続いていた。粘質土層から土器片が若干出土した。南端の TP では、標高3～4 mの部分に砂質土層があり、植物遺体が多く出土した。

<榊地区>五箇所の TP を設定し、それぞれを標高3.0～3.4m位まで掘り下げた。客土層の下には粘質土層が続き、標高4 m前後から下は礫砂土に変化する。粘質土層から土器片が若干出土した。

さぎどまりばしふきん
鷺泊橋付近遺跡 (95-3 KS)

1. 所在地 高知市神田字長田
2. 立地 鏡川水系の沖積地
3. 時代 古墳時代・古代
4. 調査期間 平成7年4月3日～4月7日
5. 調査面積 100m²
6. 担当者 田上 浩



7. 調査内容 宅地開発に伴う事前確認調査を行った。2×5 mの大きさを基本とする TP を10ヶ所設定し、現地表下2～2.5m (標高2 m前後) まで確認したが、大部分は旧河川流路とみられる砂礫土層であり遺構は検出できなかったものの、流れ込みの須恵器・土師器片が出土した。北東側の3ヶ所の TP には植物遺体を含む粘質土層があったが、人工の遺物は出土しなかった。なお、本遺跡は柳田遺跡の東側に接し、現況では神田川を挟んだ対岸に位置するが、旧河道は柳田遺跡の方角から本遺跡へ流れていたようであり、両遺跡は関連して捉えていく必要があろう。

いわむら
岩村遺跡群 (95-32 NI)

1. 所在地 南国市福船
2. 立地 物部川西岸に形成された自然堤防上の微高地
3. 時代 弥生時代後期～中世
4. 調査期間 平成7年9月29日～平成8年2月7日
5. 調査面積 2,345m²
6. 担当者 坂本芳史・横井理恵・武市義浩

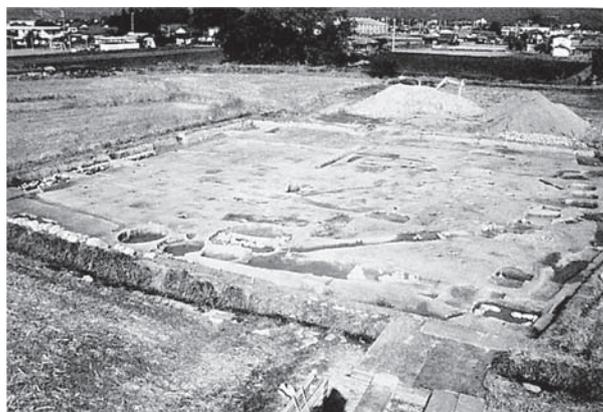


(南国市教育委員会)

7. 調査内容 平成7年度は、調査区をⅠ区、Ⅱ区に設定し、調査を行なった。Ⅰ区は弥生時代から中世にかけての重要な複合遺跡であり、またⅡ区は弥生時代中期から後期にかけての遺跡であることが判明した。

Ⅰ区では、西方隅に南北に伸びる2条に重複している堀が検出された。この堀から出土した遺物から判断すると、15世紀、18～19世紀という二次期に機能していた遺構であると考えられる。この二次期にわたる堀は、中世、戦国時代、近世における屋敷地を囲む堀としての性格が考えられる。また調査区の東端、北方を逆L字状に走る溝が検出された。その他土坑、ピットが多数検出された。これらの遺構から青磁、白磁、瓦器、土師器杯などが出土した。調査の成果としては、調査区の東方200mの場所に岩村土居城があり、堀が機能していた年代とほぼ同時期であることから城の周辺に展開した屋敷を囲む堀と考えられる。

Ⅱ区では古墳時代初頭に属する竪穴住居址が3棟、古代の溝が4条、ピットが多数検出された。竪穴住居址のうち1棟から、吉備搬入土器（鉢）が出土した。高知県で吉備搬入土器が出土した例は、春野町の西分増井遺跡などがあるが、それらはすべて甕であり、鉢が出土したのは今回が初めてのことである。その他、甕、鉢、壺、扁平片刃石斧、石包丁などが出土した。



調査区全景

く れ だ 久礼田遺跡群 (96-33 NK)

1. 所在地 南国市久礼田字前島, 前田, 白猪田, 大西, 上中島
2. 立地 冲積平野
3. 時代 古墳時代～中世
4. 調査期間 平成8年1月17日～2月14日
5. 調査面積 368m²
6. 担当者 横井理恵 (南国市教育委員会)
7. 調査内容 久礼田地区県営圃場整備事業計画に伴い, 事前に試掘調査を行なった。

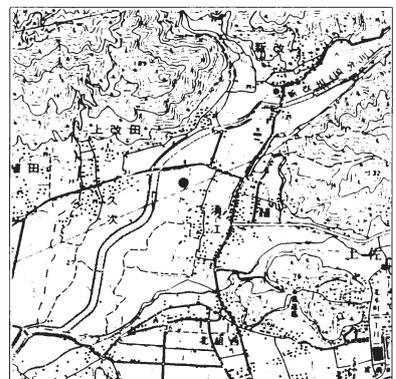
久礼田地区内には, 前嶋遺跡 (平安～中世), 白猪田遺跡 (古墳～平安) が所在する。その2つの遺跡にまたがって1区から9区まで設定し, 46本のトレンチをあけた。遺構が確認できたトレンチは6ヶ所で, 溝, 柱穴, 古墳時代のかまど跡, 竪穴住居址を検出した。出土遺物は土師器片, 須恵器片, 陶器片などである。



遺物出土状態

す え じ ょ う だ ん 須江上段遺跡 (95-39 YSM 2)

1. 所在地 土佐山田町須江
2. 立地 平地
3. 時代 弥生時代～中世
4. 調査期間 平成7年12月1日～平成8年3月29日
5. 調査面積 1,800m²
6. 担当者 中山泰弘 (土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 山田北部地区県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査。発掘調査の結果, 弥生時代の竪穴住居跡1棟, 奈良時代の掘立柱建物跡1棟 (3間×1間以上), 溝跡, 中世の柱穴多数が検出された。出土遺物は弥生土器, 石斧, 土師器, 須恵器, 近世瓦, キセル等が出土した。特に須恵器, 土師器は多量に出土した。



須恵器出土状態



遺物出土状態

よがく
予岳遺跡 (95-38 YKT)

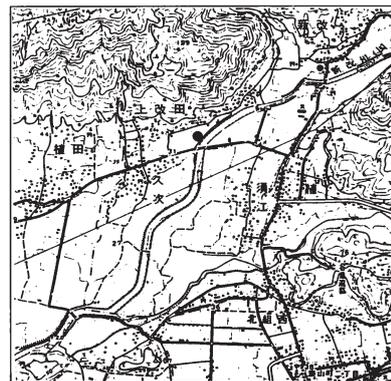
1. 所在地 土佐山田町予岳字ツエガ谷
2. 立地 丘陵
3. 時代 弥生～中世
4. 調査期間 平成7年9月1日～平成7年10月20日
5. 調査面積 500㎡
6. 担当者 中山泰弘（土佐山田町教育委員会）



7. 調査内容 山田北部県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、備前焼等が出土した。弥生土器は削平された状況で出土しており、本地域が『長宗我部地検帳』にみられる新開地であり、大規模な開拓がなされたことが伺える。遺構は中世の柱穴、溝が検出された。

かみかいだ
上改田遺跡 (95-40 YSK)

1. 所在地 土佐山田町上改田字トカリ山
2. 立地 平地
3. 時代 奈良～中世
4. 調査期間 平成7年10月23日～11月23日
5. 調査面積 800㎡
6. 担当者 中山泰弘（土佐山田町教育委員会）
7. 調査内容 新改西部地区県営圃場事業に伴う緊急発掘調査。検出遺構は柱穴多数、溝2条で室町時代と考えられる。出土遺物は須恵器、土師器、土師質土器、青磁、備前焼が出土している。



溝跡完掘状況

はやしのたににごうよう

林ノ谷2号窯跡 (95-19 YH 2)

1. 所在地 土佐山田町新改字林ノ谷388
2. 立地 丘陵
3. 時代 奈良時代
4. 調査期間 平成7年7月14日～9月13日
5. 調査面積 40m²
6. 担当者 中山泰弘

(土佐山田町教育委員会)

7. 調査内容 自然崩壊に伴う発掘調査。平成6年度に引き続き2号窯跡の発掘調査を実施した。調査の結果、全長約10mの舟底状を呈した窯跡を確認した。焚口及び煙出し部分は破壊されており不明。焚口南側に灰捨場が存在し、多量の須恵器（蓋・甕・皿・椀）炭が出土した。



林ノ谷2号窯跡完掘状況

V 条例・規則・規程等

高知県条例・規則

1. 高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例

(平成3年度3月20日条例第3号)

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例をここに公布する。

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例

(設置)

第1条 埋蔵文化財を発掘し、保存し、及び公開することにより、埋蔵文化財に対する知識を深め、もって県民文化の振興に寄与するため、高知県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を南国市に設置する。

(管理の委託)

第2条 教育委員会は、センターの管理に関する業務を財団法人高知県文化財団に委託することができる。

(委任)

第3条 この条例に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

この条例は、平成3年4月1日から施行する。

2. 高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則

(平成3年3月26日教育委員会規則第5号)

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則をここに公布する。

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則

(趣旨)

第1条 この規則は、高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例（平成3年高知県条例第3号）第3条の規定に基づき、高知県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）の管理について、必要な事項を定めるものとする。

(センターの利用)

第2条 センターを利用しようとする者（第4条において「利用者」という。）は、センターに保存されている埋蔵文化財及び保管されている埋蔵文化財に関する資料（第4条において「埋蔵文化財等」という。）の観覧、閲覧、撮影又は模写等を行うことができる。

(利用時間)

第3条 センターの利用時間は、午前8時30分から午後5時までとする。

2 教育委員会は、前項の規定にかかわらず、特に必要と認めるときは、同項の利用時間を変更す

ることができる。

(遵守事項)

第4条 利用者は次に掲げる事項を守らなければならない。

- 1 センターの施設、設備若しくは埋蔵文化財等を損傷し、又はそのおそれのある行為をしないこと。
- 2 他の利用者に迷惑を及ぼす行為をしないこと。
- 3 前2号に掲げるもののほか、センターの管理上必要な指示に反する行為をしないこと。

(休所日)

第5条 センターの休所日は、次に掲げるとおりとする。ただし、教育委員会が特に必要と認めるときは、これを変更し、又は臨時に休所日を設けることができる。

- 1 日曜日及び土曜日
- 2 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- 3 1月2日から1月4日まで及び12月28日から12月31日まで

(委任)

第6条 この規則に定めるもののほか、センターの管理及び運営に必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

この規則は、平成3年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成4年7月18日から施行する。

財団法人高知県文化財団規程

3. 財団法人高知県文化財団組織規程

第1章 総則

(趣旨)

第1条 この規程は、財団法人高知県文化財団（以下「財団」という。）の組織に関し必要な事項を定め、財団事務の適正かつ能率的な執行を図ることを目的とする。

(組織)

第2条 財団に事務局を置く。

- 2 事務局に右の表に掲げる機関を置き、その内部組織として課を置く。

- 3 理事長は、必要があると認めるときは、課に班又は係を置くことができる。

機 関	課 名
総 務 部	総務課
美 術 館	事業課・学芸課
歴 史 民 俗 資 料 館	事業課・学芸課
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー	総務課・調査課
坂 本 龍 馬 記 念 館	
文 学 館 開 設 準 備 室	

第3章 事務分掌

(埋蔵文化財センターの分掌事務)

第8条 埋蔵文化財センターの分掌事務は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託した高知県立埋蔵文化財センターの管理運営に関する事。
- (2) 所の予算及び決算に関する事。
- (3) 所の文書及び公印に関する事。
- (4) 所の職員の服務及び福利厚生に関する事。
- (5) 埋蔵文化財の調査研究に関する事。
- (6) 埋蔵文化財の整理保存に関する事。

附 則

- 1 この規程は、平成3年4月1日から施行する。
- 2 財団法人高知県文化財団組織規程（平成2年4月1日制定）は、廃止する。

附 則

この規程は、平成3年7月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成3年9月6日から施行する。

附 則

この規程は、平成3年11月15日から施行する。

附 則

この規程は、平成5年4月1日から施行する。

高知県埋蔵文化財センター年報 5

1995年度

発行日 平成8年12月25日

編集・発行 (財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

印刷 (有)西村謄写堂